

嫌われた日本 ～戦時ジャーナリズムの検証～
雑誌『FORTUNE』日本特集号の分析
第一部

高島 秀之

“HATED JAPAN” ～The Journalism of War～
An Analysis of “FORTUNE” Magazine
September, 1936 / April, 1944 / December, 1944
— PART I —

Hideyuki Takashima

Abstract

Magazine “**FORTUNE**” had the three special issues on “Japan and the Japanese”, “September, 1936”, “April, 1944” and “December, 1944”, before and during The World War II.

The “April, 1944” issue was based on “September, 1936” article. The “December 1944” issue was based on the “April, 1944” article, but the texts had delicately different nuances. For example, “**Japanese**” in the 1936 issue was changed to “**Jap**” in the 1944 issue.

Unfortunately, Japan became the enemy of the U.S. and had to be defeated during World War II. Irrespective of the fact that it was war-time, “**FORTUNE**” Magazine wrote reasonably unbiased opinion about Japan and the Japanese against public opinion. These three “**FORTUNE**” issues influenced Japan’s surrender to the Allied Forces.

Part 1

Analysis1 : The weighing of these three Special Issues.

Analysis2 : The editorial principles of “**FORTUNE**” and editorial stuffs in the war time.

Analysis3 : “Issei, Nissei, Kibei”—Japanese blood, two-thirds of them citizens who were evacuated into protective custody.

Analysis4 : “Who runs the Emperor?” — After defeat, disarm, occupy Japan, to evolve Japan with which U.S. can deal.

Part 2

Analysis1 : “What to Do with Japan?”

Analysis2 : “The Japanese Army has its Day”, “Little Industry, Big War”

Analysis3 : “To Atomic Ages-The Office of Censorship in World War II”

Epilogue : The Editorial Stuff of “**FORTUNE**” Magazine, After the War,
How did they transfer their old job for another?

まえがき

パールハーバーの再現

同時多発テロから、アフガニスタン、イラクに至るブッシュの戦争を歴史はどう評価するのだろうか？

二〇〇一年九月一日、世界はアメリカのテレビのナマ中継で、貿易センタービルをみていた。そのビルに二機目のジェット機が突っ込んだ時、アメリカのテレビ局のリポーターは「パールハーバーの再現だ！」と叫んだ。

しばらくして、テロに対する報復が遅いと詰め寄る世論に、ラムズフェルド国防長官は、「パールハーバーの時も、反攻に至ったのは三ヶ月後だった」と記者会見で語った。「パールハーバー」は、テレビ・リポーターや長官が、ナマのテレビでとっさに発した言葉である。どちらも日本のテレビは翻訳をせずに無視した。「同時多発テロ」という事の重大さに、そんな些事に関わっている暇はなかったのかもしれない。

イラク戦争が泥沼化すると、ノルマンディー反攻作戦から六〇年というメモリアルもあって、ブッシュ大統領は「太平洋戦争もあの卑劣な奇襲から始まった」と間接的な表現ではあるが、同時多発テロとパールハーバーをオーバーラップさせる発言を繰り返した。ブッシュはイラク戦争が、ベトナム戦争や湾岸戦争の泥沼化した戦争とイメージがダブることを避け、第二次世界大戦時の自由主義国家が一致して求めた「自由を守る戦争」というイメージを定着させてがっていた。

確かに、アメリカがこれほど大規模な破壊を受けたのは、パールハーバー以来の出来事であった。

雑誌『フォーチュン』

一九三〇年、雑誌『フォーチュン』(FORTUNE)を創刊したタイム社の社主ヘンリー・R・ルース(Henry R. Luce)は「まず、何よりもアメリカの利益が尊重され、地球全体に影響力を持つ存在となり、恵まれない国を救い、世界の平和を掻き乱すものには容赦なく立ち向かうことだ。そうすれば、今世紀アメリカは栄光と名誉を手にするだろう」と書いた。二〇世紀、ルースの予言通り、アメリカは栄光と名誉を手にしたのだろうか？

タイム社(現タイム・ワーナー社の出版部門)が出版する雑誌『フォーチュン』は、現在は発行部数八七万部、世界一二〇ヶ国で三百万の読者を持つ隔週刊誌である。世界のベスト五百企業を査定し、ランキングを発表する(Fortune Global 500)など、ビジネスマシを中心広く読まれている雑誌である。

この小論の主題である『フォーチュン』一九四四年四月「日本特集号」が刊行された頃は、隔週刊ではなく月刊であった。そのページ数は三百を超える分厚さで重さは一kgもあるのか、ハンド・キャリーするには不向きな雑誌であった。

若千二三歳でタイム社を創設したルースはアメリカ・ジャーナリズムの歴史の中でも特異な存在である。社では「ヘンリー」と呼ばれ、単なるジャーナリストという以上に、アメリカにおけるオピニオン・リーダーの役割を長年に渉って果たし、合衆国政府の対外政策に大きな影響を与えたメディアの帝王であった。

雑誌『フォーチュン』の特徴は、写真や絵、統計のビジュアル化など、グラフィックスを多用して視覚に訴える「フォーチュン・グラフィックス」と呼ばれる編集スタイルにあった。ルースは書き手と編集者の壁を取り払い、テーマごとに「エディトリアル・スタッ

「フ」制度（ティームを組んで取材、執筆、編集までを一貫して担当させる制度）によって、主題を掘り下げる方式を確立した。

ルースは『フォーチュン』の編集部には有能な人材を集めた。時期は異なるが、この雑誌の編集や執筆に加わった人々を挙げると、後にローズヴェルト大統領のブレーンとなるアーチボルド・マクリーシュ (Archibald MacLiesh 一九二九年から約一〇年間)、『豊かな社会』の著者で J・F・ケネディ大統領のブレーンとなる J・F・ガールブレイス (J. F. Galbraith 一九四三年～一九四八年、途中で国務省出向)、『脱工業化社会の到来』の著者ダニエル・ベル (Daniel Bell 一九四八年から一〇年間)、『すでに起こった未来』の著者ピーター・F・ドラッカー (P. F. Drucker 一九三九年『タイム』から一九四〇年『フォーチュン』へ移り、同誌一〇周年特集に参画)、『第三の波』の著者アルビン・トフラー (Alvin Toffler 一九五九年から副編集長まで勤めた) などがある。彼らは『フォーチュン』を去った後、大学教授へと転じたり、世界的なベストセラーをものにして、オピニオン・リーダーとなっているが、いずれも雑誌『フォーチュン』で体験したフィールドやそこで培った取材力をそのベースにしている。

寺島実郎氏との出会い

筆者が『フォーチュン』日本特集号に興味を持ったのは、寺島実郎氏(当時、三井物産ニューヨーク支店、現日本総研理事長)との出会いからである。一九九〇年、NHKのプロデューサーをしていた筆者は、ニューヨークで三井物産勤務の寺島氏と出会った。彼はニューヨーク工科大学のメディア・ラボに筆者を案内すると、「この大学のラボを人材ごと日本で買わないか。NHKもこれからCG

を手掛けるのだから」と話しを切り出した。当時からスケールの大きな発想力を持つ三井マンであった。バブルの崩壊寸前でもあり、銀行でも巻き込めば可能性のない話ではなかった。確かにニューヨーク工科大学のラボは、そのCGの技術力と応用力において、ネグロポンテ所長率いるMITのラボよりも実用的で、ソフトウエア技術も優れていた。最終的にその交渉は成立しなかったが、寺島氏とは妙に気が合って、物産のワシントン事務所長に転じてからも連絡を取り合っていた。

ある日、ワシントンに彼を訪ねた時のことである。かつて、ニクソン大統領が弁護士だった頃に使っていたホワイトハウスが見下ろせる彼のオフィスで、筆者は初めて雑誌『フォーチュン』一九三六年九月の日本特集号の表紙を見た。

菊の御紋章と拡大しつつある大日本帝国の領土を組み合わせたデザインを持つ『フォーチュン』の表紙は額装されて壁に掛かり、瀟洒なオフィスと奇妙なコントラストをなして人目を惹いた。彼はこの雑誌の表紙をニューヨークの青空市場で見掛け、その表紙のデザインに興味を持ち、取材を始めたのだと言う。寺島氏は、その後、この『フォーチュン』日本特集号を分析し、『ふたつの『FORTUNE』(ダイヤモンド社一九九三年刊)という著作に纏めている。タイトルに「ふたつ」とあるのは、三六年九月の『フォーチュン』と九一年五月の『フォーチュン』日本特集号と比較して検討を行ったからで、巻末には三六年の抄訳と併せて、九一年の全訳が載せられている。「日本株式会社」という言葉を、この三六年の『フォーチュン』が初めて用いたものであることを紹介し、歴史の教訓から、九〇年代の日米関係を逆照射した好著である。本論の主題である一九四四年四月刊行の『フォーチュン』日本特集号についても、三六年の特

集号を再編集したものととして、この中で紹介されている。それが、筆者が四四年四月発刊の『フォーチュン』日本特集号に関心を持った最初であった。

訳書『フォーチュン版「大日本帝国」の研究』

四四年四月刊行の『フォーチュン』日本特集号は、刊行されてから四〇年程経った一九八三年に『フォーチュン版「大日本帝国」の研究』という名で翻訳され、徳間書房から出版されていた。訳者は熊沢安定氏（当時、手塚山学院大学教授）で、巻末に鶴見俊輔氏の解説が付されている。

筆者はそれを原著の雑誌と比較して、この訳書が、『フォーチュン』四四年四月号そのものの翻訳ではなく、編集責任と著作権はタイム社にあるものの、NPO組織から出版された「縮刷版」（タイトルは JAPAN By the Editors of FORTUNE MAGAZINE）の訳書で、オリジナルの雑誌とは内容を異にしたダイジェスト版であることに気付いた。「縮刷版」は、四四年四月号の『フォーチュン』誌を再編集し、そのポケット版として同じ四四年の一月一日に出版されたのである。分厚い雑誌『フォーチュン』は携帯には不向きであった。進駐軍のポケットに入るハンディなサイズというのが、この縮刷版の使命を物語っている。

縮刷版の版元である OVERSEAS EDITIONS, INC. は、第二次世界大戦中にアメリカの出版社、図書館、書店によって結成されたNPO組織で、アメリカ政府が他の国際連合諸国や米軍に「日本」を理解させようという目的を担っていた。

『フォーチュン』四四年四月号では、「We」という言葉が「アメリカ合衆国あるいはアメリカ国民」を指しているが、縮刷版の「We」

は、「国際連盟あるいはそれに加盟した諸国民」を指している。この縮刷版からは、アメリカがこれから占領する「日本」をどう理解し、リードしようとしているか、それを他の連合国と共有しようとする意図をみて取ることができる。

「JAPANESE」から「JAP」へ

雑誌『フォーチュン』は、一九三〇年代から四〇年代に掛けて、三六年九月、四四年四月、四四年一月と三回に涉って再編集された日本特集号を発刊している。それは太平洋戦争の直前からその終局を迎えようとする時期にあたる。四四年発刊の二つは、三六年九月号を基にしているが、三六年の特集号では「JAPANESE」だったものが、四四年には「JAP」と呼び変えられているように、出版された時期によって、記事に微妙な差異が生じている。

筆者はこの三つの『フォーチュン』の編集のズレに興味をもった。この間、差し換えられた記事は何か、何故それは差し換えられたのか？ 三六年発刊の日本特集号以来の三つの『フォーチュン』を比較しつつ読み解くことにより、真珠湾攻撃を挟んでのアメリカの対日感情、世論の動向、連邦政府の政策転換、さらには、戦時におけるジャーナリズムの姿勢が見えてくるかも知れないと思ったからである。

たとえば、三六年九月の日本特集号にはなくて、四四年四月号に大きく扱われたものに、日系人の強制収容を扱った「一世、二世、帰米」という章がある。パールハーバー以後、西海岸に住む日系人は敵国人として、アメリカ市民であるか否かを問わず、財産を没収され、収容所送りとなった。日系二世部隊が収容所から出征し、ヨーロッパ戦線で勇敢に戦い、全滅の危機にあったテキサス大隊を救出

する武勲を立てていたにも拘わらず、彼らの家族は鉄条網の中に置かれ、終戦まで解放されることはなかった。四四年四月号『フォーチュン』は、その実態を報道し、アメリカ政府の犯した過ちとして日系人の強制収容を非難している。そして、当然のことながら占領目的で出版された「縮刷版」からは、この章は姿を消している。

アブグレイブ収容所・グアンタナモ収容所で何が？

あれから六〇年、ブッシュ大統領はテロ根絶という名目で、テロリストの疑いのあるアメリカ国内のイスラム教徒を捕捉する大統領令を発した。

収容所の捕虜の多くは、アフガニスタンでアルカイダという疑いで捉えられたモスレムで、その数は六百人に及んでいる。彼らはテロを策謀した戦闘要員であり、ジュネーブ協定での捕虜にはあたらないとするのが、アメリカ政府の主張である。

二〇〇二年一〇月までは、彼らはカリブ海の島に位置するキューバのグアンタナモ収容所で尋問を受けていた。何故か、長い覆面とも帽子ともつかぬものを頭から被せられ、オレンジの囚人服を着せられて、鉄条網に囲われていた。自白したものは、その衣装がオレンジから白に替わる。このグアンタナモ収容所は別名「キャンプXレイ」(レントゲン照射のようにテロリストをあぶり出す意か?)と呼ばれ、見えざるテロのネットワークをあぶり出すというのがその目的であった。アメリカ軍がウェブ上で公開した写真によれば、オレンジの衣を纏った捕虜の目はゴーグルで、口はマスクで覆われていた。

世界からジュネーブ協定違反という非難を浴びると、やがて、その写真はウェブから消えた。しかし、ラムズフェルド国防長官は、

疑わしいものを野放しには出来ないという理由から、テロリストの疑いのあるものを隔離する正統性を主張した。

フランスの『レクスプレス』誌によれば、二〇〇二年一〇月、この悪評高い「キャンプXレイ」は閉鎖され、二〇〇二年七月二十八日のロイター通信は、九七〇万ドルの費用で、その近くに、新たに「デルタ・キャンプ」という収容所が建設されたと報じた。現在(二〇〇四年一二月)、この収容所に関する情報はあまり多くないが、『マイアミ・ヘラルド紙』は、「個室があるというものの、船のコンテナを流用したものであり、六百人の収容者のうち、一〇%は精神に異常をきたしている」と報じている。

一方、バグダッドのアブグレイブ収容所では、イラク戦争の捕虜がアメリカ兵士による強圧的な尋問や虐待、性的暴行が行われた事実が明らかにされた。

二〇〇四年一二月現在、多くのアラブ人が不当に逮捕され、釈放されていない。市民生活においても、アラブ系アメリカ人に対する殺人事件、あるいは、解雇や嫌がらせは後を絶たないでいる。筆者には、これは六〇年前のバールハーバー以後のアメリカ西海岸における日系人と同様の扱いのように映る。

戦時の検閲と『フォーチュン』

真珠湾攻撃は米政府にジャーナリズムに対する検閲業務の必要性を思い知らせることになった。大統領は合衆国修正憲法第一条の「プレス」の自由」に照らして、それをジャーナリストの自主性にゆだねることにした。ローズヴェルトはAP通信のバイロン・プライス(Bayron Price)を検閲局長に指名する。以後、戦時の国家秘密を守るための自主検閲は、検閲局長のプライスとそのスタッフの手で行われ

ることとなった。

タイム社の社主ヘンリー・R・ルースは、戦時における自主検閲を支持しなかった。政府の秘密主義を非難し、『タイム』は、「検閲の規程と良心との葛藤に直面したならば、我々は良心に従わざるを得ない」として、一旦は、自主検閲に従わない旨を検閲局に対して通告しているが、最終的には、マンハッタン計画による原爆開発とレーダーの開発の記事は戦後になって『タイム』や『フォーチュン』に掲載されることになった。

しかし、ジャーナリズムの沈黙は何をもたらしたのだろうか？
確かに検閲規程を遵守すれば、報道の自由を侵害せずに、敵から軍事機密を守ることはできたかもしれない。自主検閲とは、国家の利益を優先するという名目で、ジャーナリストに自主的にペンを殺すことを押しつけたものではなかったか？

一九四二年二月、ルースはロバート・ハッチンス (Robert Hutchins、シカゴ大学学長) に「プレスへの自由」に関する調査を依頼している。タイム社が二〇万ドル、その他が一万五千ドルの負担だから、ほとんどタイム社の依頼といつてよい。

パールハーバーから一年後、第二次世界大戦で自主検閲が行われている最中、ルースは「自由で責任あるプレスとは何か？」を問っているのである。(この詳細は第二部に掲載する)

CNNからアルジャジーラに

一九九一年の湾岸戦争では、クリーンな戦争を印象づけるために行ったペンタゴン(国防総省)がジャーナリズムを縛ったメディア・プールがあった。戦争が始まるのを待構えていた世界のジャーナリストたちにとって、多国籍軍のスポークスマンが発表する情報以外

に戦争を取材するすべはなかった。

湾岸戦争ではメディア・プールという縛りにも拘わらず、唯一、報道を続けたのがCNNのピーター・アーネット記者であった。彼はバクダッドからハンディな衛星中継機を使って、多国籍軍が破壊したという生物化学兵器工場が赤ちゃんの粉ミルク工場であることを伝えた。

その後のアフガニスタン侵攻とイラク戦争では、湾岸戦争でピーター・アーネットが果たした役回りをアルジャジーラが演じた。

アルジャジーラはペルシャ湾に突き出た半島にあるカタールに一九九六年に設立された衛星テレビ局である。局が置かれている首都ドーハにコンパスの軸を置いて円を描くと、近隣のイスラム圏がすっぽりと納まるようにみえる。

二〇〇三年三月、アメリカのイラク侵攻以来。アメリカのヘリの墜落、クラスター爆弾の使用をアルジャジーラが真っ先に伝え、それをアメリカ、イギリス軍が追認するボタンが繰返され、ブッシュが戦争終結を宣言した後も、テロリストによる各国の人質の映像を流すなどイスラム世界からの情報発信はアメリカを苛つかせた。

焼かれた星条旗

九・一一以降、アメリカで最も売れたのは星条旗であった。国民はアメリカの威信復権の願いを込めて星条旗を立てた。冬期オリンピックの開会式でグラウンド・ゼロの焼けただれた星条旗を入場させた演出もその思いからだろう。しかし、二〇世紀において星条旗ほど世界で焼かれた国旗はない。

『ザ・ストーム』という映画で星条旗を燃やすシーンを演出したアラブの監督ハーレッド・ユーセフは「アメリカ国民は過去五〇年

間、合衆国政府が重大な罪を犯し、それによって多くの人命が失われたという事実を知らない。星条旗を燃やすという行為はアメリカへの怒りを示している。この映像は私が映画のためにつくったシーンではない。湾岸戦争で実際に起きたことであり、その後も、毎日、世界の何処かで星条旗が焼かれている。これほど長い間、一つの国旗が燃やされた事例を私は知らない」と語った。

二一世紀のアメリカのメディア状況

冷戦後、唯一の超大国となったアメリカで、国家のイデオロギーを支えているメディアはどのような状況にあるのだろうか。

たとえば、『フォーチュン』をその出版部門に抱えるタイム社も、映画制作やCNNを抱えるワーナー・コミュニケーションズ、さらにはネットビジネスを展開するアメリカ・オン・ラインと次々と資本提携を繰り返し、AOL・タイム・ワーナーとなり、さらにAOLが離脱するなど、メディアの連携合掌が進んでいる。ニュースが売れる商品であることが求められる時代、アメリカ・ジャーナリズムは今、そのよりどころを何に求めようとしているのだろうか？

世界におけるマイノリティとメディアの状況を考える時、太平洋戦争時に出版された雑誌『フォーチュン』の記事を検証することは、それなりに意味のあることかもしれない。この小論を企画したのは、六〇年前の雑誌『フォーチュン』を検証することによって、九月一日をパールハーバーの再来として捉えるアメリカ、あるいはチェン関連の報道を弾圧し続けるロシア政府に象徴される権力とジャーナリズムとの相関が見えて来るかもしれない。そしてそれは戦時におけるジャーナリズムの有り方を示唆することになるかもしれない

れないと思ったからである。

第二章 『フォーチュン』日本特集号（一九三六～一九四四）

一九三〇年代から四〇年代に掛けて、雑誌『フォーチュン』は二度に渉り「日本特集」を組んだ。最初の特集号が出された一九三六年、欧米諸国にとって列強に伍してアジアで覇権を争う日本はベールに包まれた謎の国であった。岡倉天心やフェノロサ（Enosio Fenolosa）によって紹介された日本は、神秘に満ちた美しい夢の国であった。その神秘の国が当時世界最強といわれたバルチック艦隊を日本海に葬り去り、有色人種として初めて白人国家に勝利し、天皇の名のもとにアジア侵略を繰り返す大日本帝国となった。いったい日本で何が起きているのか？ 最初の『フォーチュン』日本特集は日本を包むベールを剥ぎ取ろうとする試みでもあった。一九四四年に出版された二度目の日本特集号は、三六年の『フォーチュン』をベースに再編集されたものであった。出版時期は真珠湾から二年半後、すでに戦局の帰趨は明らかであった。ドイツ、イタリアの崩壊は決定的であり、連合国軍のターゲットが日本一国に絞られようとしていた時期である。『フォーチュン』の記事が、戦後の日本をどうするかまでも視座に入れたものとなっていて不思議ではない。

『フォーチュン』一九四四年四月号

手元にアメリカで一九四四年四月に刊行された雑誌『フォーチュン』がある。表紙に「日本」という文字が墨痕鮮やかに躍り、サブタイトルは「日本特集号」とある。大平洋戦争最中の刊行である。定期講読以外この雑誌が日本に入ることなかっただろうし、まして、この『フォーチュン』日本特集号は我が国では発禁処分となっているから、後年、資料として大学が一括購入したものと思われる。



『フォーチュン』1944年4月号

六〇年を経た雑誌は黄ばみ、触るとボロボロと崩れ落ちてしまうほど危険な代物である。古いからだけではない。大平洋戦争末期に刊行されたので、紙質が悪いのである。それより古い三六年九月発刊の『フォーチュン』日本特集号は、しっかりといてページを繰っても崩れることはない。このボロボロの雑誌『フォーチュン』が、戦後の日本の国家体制や占領後の日本のありようまでを示した内容を持っていた。少なくとも、そうした問題意識を持ってこの雑誌を読み解くと、大平洋戦争中のアメリカの対日戦略、勝利を確信した時点における敗戦国日本に対する処理の仕方までが見えて来るのである。

『フォーチュン』一九三六年九月号

『フォーチュン』は、一九三六年九月に初めて「日本特集号」を刊行した。その年の秋には、ナチス・ドイツが主宰したベルリン・オリンピックが開催され、日本では二・二六事件が起きている。刊行前年の秋、雑誌『フォーチュン』は二人の記者を日本に特派し、彼らは取材制限に悩まされながらも、日本特集号を纏めた。



『フォーチュン』1936年9月号

「ジャパニーズ」という言葉ほど急激にその意味を変化させてきた言葉はない」という書出しで始まるこの日本特集号は、単なる雑誌の日本レポートというより、歴史や社会構造、日本人のメンタリテイを分析して奥の深い社会洞察力を持つ優れたドキュメントとなっている。たとえば、日本経済について次のような分析がある。

（一九三六年九月）

安い労働力を背景に、世界のどこよりも安い製品を作り上げる工場。煙突は煙りを吐き続けて、低価格を武器に製品を世界に売り捌く。それは『日本株式会社』（この言葉はここで初めて登場する）からの世界への挑戦のようだ。

ただし、ここで云う日本株式会社 (Japan Incorporated) とは三井とか岩崎という巨大同族会社が利益を生む事業体を意味し、官僚に護れた護送船団とは意を異にしている。

彼らは同時に「資源を持たない国」という日本のアキレス腱を発見し、記事にしている。昭和初期、日本は戦略物資のほとんど総ての原料を輸入に頼り、その八〇%がアメリカからの輸入であること。さらに輸出においてもアメリカは最大のマーケットであること。つまり、戦争を仕掛けようとする日本を経済的にはアメリカが支えていることを暴露している。

『フォーチュン』四四年二月発行縮刷版

もうひとつ、四四年四月号の『フォーチュン』を再編集したポケットサイズ版として、その七ヶ月後に出版された「縮刷版」がある。雑誌『フォーチュン』は三百ページを超え、グラフィックスや広告で飾られて厚く重い。ポケットに入るハンディなサイズというのが、縮刷ダイジェスト版の使命を物語っている。版元の OVERSEAS EDITIONS, INC. は、戦時にアメリカの出版社、図書館、書店によっ



『フォーチュン』44年12月発行縮刷版

て結成されたNPO組織であり、著作権は「タイム社」にあると記されている。

縮刷版の裏表紙には、

〈四四年二月縮刷版裏表紙から〉

すでにドイツの敗勢は明らかであり、連合軍の力の総てが日本に向けられようとしている。この日本という極東の敵は、戦時においてはいくせにタフで、巧妙で、御し難い存在ということはずでに証明済みだ。この本は、そもそも日本人とは何ものなのか、如何に働き、何を考え、何を食べ、どんな楽しみを求めているのか、また、何を信じ、何を求め、それをどう実現しようとしているのかについて述べたものである。連合国は日本や日本人に関するこれらの事実を戦時のみならず、戦後処理にあたる平和時においても理解しておかなければならない。

として、四四年四月号の『フォーチュン』を再編集したものであること、連合国や米占領軍を対象としたものであることを明記している。

四四年四月号の『フォーチュン』から一二月の縮刷版の刊行に至る八ヶ月間、戦局は大きく動いた。六月、ヨーロッパ戦線では、ノルマンディー上陸作戦による連合軍の反攻が開始され、九月には、ローズヴェルトとチャーチルが会談し、原爆の対日使用が検討されている。そして、縮刷版刊行の二ヶ月後には米英ソによるヤルタ会談がもたれている。この縮刷ダイジェスト版は、追いつめた敵に対する最後の一撃のためのみならず、戦勝国たる連合国の戦争終結と終戦処理や占領政策のために企画され、再編集されたものと思われる。

る。

この縮刷版は、日本を知るための格好の案内書として、占領軍の司令官や将校のポケットにねじ込まれていたであろう。これから占領政策を展開する日本とはどんな国であり、日本人とは何者なのか。それを彼らはこの本を通して知り、対策を練ったに違いない。

縮刷版の「序」には、次のようにある。

〈四四年二月縮刷版「序」から〉

日本は、今や悪の象徴となっているが、日本に関するまともな考察はなきに等しい。連合諸国は戦場で対峙する敵としてだけでなく、日本とは、日本人とは何かについて知るべきである。日本との駆け引きは二〇年や三〇年では終わらない。戦争に勝利して終わるのではなく、これからも戦争をしない国にしておかなければならない。これから先が長いのである。

かつて、日本といえば、遠い、霞の彼方の国であった。人形の家のような、箱庭のような小さな庭と紙の家に、礼儀正しい、つましやかな男女が暮らす国であった。その繊細な感覚を持つ国が、一夜にして、二〇世紀の世界で、機械を動かし、船を買い、国際市場に割り込み、周囲をなぎ倒し、領土までもかすめ取るようになっていたのである。連合諸国は最初、日本は近代戦に半年も耐えられるとは思っていなかったが、いざ開戦となるとそんな存在ではなかったことを思い知らされた。それを日本兵の根性、残虐さ、忍従性だのというだけでは、敵の本性を明らかにしたとはいえない。敵は機械も兵器も使いこなし、連合諸国を研究しているのである。こちらも十分敵を研究すべきである。国際連合はこの戦争に勝利しなければならぬ。本書はこうした観点から戦争と

平和との問題を論ずることにする。ただ、あくまでも資料を提供して、その判断は読者に俟つものである。

開戦以後の資料は、アジアにおける日本軍の非占領地域からの情報、NHKの放送、強制送還によって帰国した日本在住者の記憶による。日本の真の姿、日本人のものの考え方や日常生活、人生観など、われわれとの間のギャップを知ることが必要なことである。彼らを理解することはできるのである。

一フォーチュン誌編集局から一

本書は『フォーチュン』一九四四年四月号に、一月一日までの最新資料を付け足し、改訂したものである。

『フォーチュン』の記者をしたことのあるJ・F・ガルブレイス（経済学者、ハーバード大学名誉教授）は「政府が社主ルースに対して、日本特集号を出して欲しいと要望を出して来た。それからその縮刷版が出され、それはアメリカ軍に広く配付された。政府も軍も敵国日本に対して理解をする必要があった」とNHKのインタビューに答えている。政府とは、戦時情報局OWI（Office of War Information）を指していると考えられる。米政府筋は戦っている不可解な敵「日本と日本人」を何とかクリアカットしたいと願っていたのである。

四四年四月号の発刊意図

四四年四月号の『フォーチュン』に戻ろう。この雑誌がマンハッタンで企画・編集されていた四三年暮、マキン・タワラの守備隊が全滅、年明けには、マーシャル群島守備隊が全滅。圧倒的なアメリカの軍勢力を前に、サイパン・グアム両島の陥落も時間の問題であっ

た。

アメリカの東洋美術史家ウォーナー（Lungdon Warner）が、アメリカ政府のロバーツ委員会に日本の重要な文化財を網羅した「ウォーナー・リスト」を提出したのも四三年のことである（後にこのリストが京都・奈良の文化財を戦災から救ったという説はウォーナー自身によって否定されている）。

この特集号は大太平洋戦争の帰趨が決したといっても良い時期に刊行された。戦後の日本をどうすべきかという問題意識のもとに企画され、最終章の「戦後の対日処理」では「妥協的な和平ではなく、無条件降伏を」求めるなど、終戦から占領に至るアメリカの対日政策の下敷きとも思える記事がある。三六年の特集号からさらなる情報を積み上げ、敵国日本を執拗に解析していることには驚かされる。四四年四月号の発刊にあたって、コラム「フォーチュン・ウィール」に編集長は次のように編集経緯を書いている。

（一九四四年四月）

今回はリポーターを日本に送ることはできなかったが、戦争直前まで、極東に滞在していた何人かの専門家の智慧を借りることができた。日本の収容所に拘留されていたり、中国やマニラで日本軍の蛮行を目撃したジャーナリストのレポートが入っている。

一九四四年四月号『フォーチュン』の目次

四四年四月の日本特集号はどのような骨格を持っていたのだろうか？ その目次から辿ってみよう。

特集 日本と日本人 JAPAN AND THE JAPANESE

全ての記事を我々が打ち倒さねばならぬ軍勢力と決着をつけるべき太平洋問題にささげる

目次

フォーチュン・ウイール(序)

一世、二世、帰米 Issei, Nisei, Kibei

合衆国は二一万人の日系人(その三分の二はアメリカ市民である)を「保護収容所」に収容した

日本の人口 How Many Japs?

一九四〇年の七三、一一四、〇〇〇人が、一九七〇年は?

我々は何をなすべきか? The Job Before Us

滅ぼすべき敵の性癖を知り、敵の野心の根拠を探ることである

神々への道 The Way of the Gods

南進の背後には、数世紀に及ぶ日本人の心をねじ曲げた行動のパラドックスがある

天皇を操つるものは誰か? Who Runs the Emperor

天皇の名を出しさえすれば、軍の関わる政治力学に決着がつく

日本の顔 The Look of Japan

平和時における日本の素顔

戦争への道 Japan's Road to War

近代日本の政治と軍事の歴史

市民生活 The Citizens-Subject

市民はタフで忍耐強い。よく働くが食事は粗末であり、非常時の今、その傾向は加速されている

農民 The Farmer

狭い耕地の中にその欲望は抑え込まれている

平均的日本人 The Control of H. Fujino

彼は自ら事を判断していると確信している

日本政府は彼がそう考えてくれるのを喜んでる

日本の占領地域 The Geography of Conquest

日本製の地図に従った日本の占領地域

小さな産業と大戦争 Little Industry, Big War

勝利に向かい力強く成長するため、日本の産業は新しい帝国の植民地を必要とする

戦いの時 The Army has its Day

その最後の望みはわれわれがそれを完全に打ち砕かぬようにすることである

大東亜共栄圏 Asia for the Japanese

ちっぽけな日本のいかさま野郎がアジアを征服しようと暴走している。彼らは愚かで残忍である

戦後の対日処理 What to Do with Japan

武装解除し占領した後、我々が扱うことのできる社会を発展させる機会を日本人に与えるのだ

日本陸軍 The Japanese Army

そのマンパワーと兵力の解析

ジャップがマニラを占領した日 When the Jap Came to Manila

一九四二年一月二日の侵攻のあと、マニラで何が起ったか?

合衆国の日本人の資産 What They Left Behind Them

アメリカの日本に関する知識
フォーチュン・サーベイ(調査)が市民の無知を暴露

一九三六年の『フォーチュン』日本特集号から、四四年四月の『フォーチュン』に新たに付け加えられた章は

- 一、「一世、二世、帰米」(Issai, Nisei, Kibei)
- 二、神々への道 (The way of the Gods)
- 三、我々は何をすべきか (The Job Before Us)
- 四、「ジャップがマニラを占領した日」(When The Jap Came to Manila)
- 五、「戦後の対日処理」(What to Do with Japan)
- 六、「大東亜共栄圏」(Asia for The Japanese)
- 七、「小さな産業と大戦争」(Little Industry, Big War)である。

逆に一九三六年の『フォーチュン』にあつて、四四年四月の『フォーチュン』で削除された章は

- 一、日本の日の出 (Japan's Rising Sun)
- 二、左折禁止—思想統制 (No Left Turn—Science of Thought Control)である。

その他、各章に涉つて改変が行われ、三六年にタイトルが「誰が帝国を支配しているのか?」(Who Runs The Empire?)だった章は、四四年には「天皇を操るものは誰か?」(Who Runs The Emperor?)へと変わる。三六年では「ジャパニーズ」と書かれた記事も「ジャップ」と変わる。

次頁の図は一九三六年九月、一九四四年四月、一九四四年一二月の目次から、三つの『フォーチュン』における記事の内容の変遷を辿った一覧である。



□ 本論で取扱った章
注：三つの号の目次は
関連がわかるよう
に並べ変えてある

第二章 四四年フォーチュン編集部

一九三〇年代から四〇年代にかけて、『フォーチュン』の編集スタッフには人材が集っていた。社主ヘンリー・R・ルースは、既存のジャーナリストではなく、手垢の着いていない優れた感性の持ち主を編集スタッフとして求めていた。『タイム』や『フォーチュン』の発行部数が伸びるにつれ、彼らは高給取りにもなっていた。スワンバーグ (W. A. Swanberg) 著の『ルースの帝国』(Luce and His Empire) によれば、一九三五年には、雑誌の編集者たちは年収三万ドル近く、マンハッタンの広いアパートで暮らし、ロールスロイスを乗り回すリッチな生活を送っていたようである。しかし、優秀な記事を書く奴は、揃いも揃って左翼なんだと社主ルースを嘆かせる程、『フォーチュン』内におけるペンは自由でもあった。

記者 J・F・ガルブレイス (一九〇八)

『豊かな社会』の著者であり、ケネディのブレイン、日本通としても知られるJ・F・ガルブレイス (J. F. Galbraith) も一時期『フォーチュン』の記者を経験している。

第二次世界大戦中、彼はローズヴェルト大統領のもとで価格統制政策を実施したが、批判を浴び、四三年秋、官を辞して『フォーチュン』の編集部で一記者として働いた。その時期は四四年発刊の『フォーチュン』日本特集号が企画されていた頃と一致している。『フォーチュン』の編集部について、ガルブレイスは次のように回想している。

私は記者として編集部に参加することになった。短期間では

あったがエキサイティングなジャーナリスト暮らしが始まった。文章を書いて生活するのは私にとって初めての経験である。その修行の場所としてフォーチュンの編集部は最高の場所だった。フォーチュンは文章が素晴らしい雑誌の一つと評価されていたからだ。編集幹部は保守的な考え方の人が多かったが、記者にはリベラル派、社会主義者など様々な考えの持ち主がいた。「良い記者はなぜたいい左派なのか」と嘆く編集者もいた。ただ、良い記事さえ書いてくれれば思想は問わないという雰囲気は編集部内にはあった。文章をうまく書くことを教えてくれたのはルースという編集者だ。私の原稿を見ながら鉛筆で無駄な言葉をそぎ落としていく。それでも言いたかったことはちゃんと残り、わかりやすくなくなった。ルースに会って以来、私はいつも彼が肩越しに自分の文章を見ている気持ちになって、草稿を読み直すようになった。

～日本経済新聞社『私の履歴書』から～

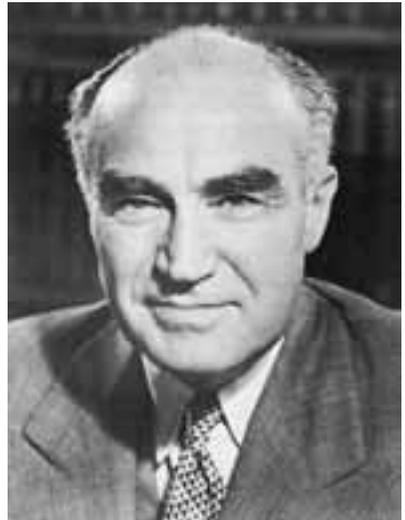
ガルブレイスの最初の記事は「平和への移行 (TRANSITION TO PEACE BUSINESS IN A. D. 1940)」として『フォーチュン』四四年一月号に掲載されたが、それにガルブレイスの署名は見当たらない。カルブレイスの名が編集スタッフの一員として『フォーチュン』誌に掲載され出したのは、一九四四年七月号からである。

社主ヘンリー・R・ルース (一八九八～一九六七)

ガルブレイスの原稿をチェックした編集者のルースとは、若冠二三歳で自ら興したタイム社の社主となったルース自身である。彼は、時事週刊誌『タイム』(一九二三年)、経営月刊誌『フォーチュン』(一九三〇年)、それにグラフ週刊誌『ライフ』(一九三六年)を矢



ヘンリー・R・ルース（エール大学在学中）
中央のいすに座っているのがタイムの共同経
営者ブライトン・ハッデン、その左隣がルース



社主 ヘンリー・R・ルース（1898～1967）

継ぎ早に創刊し、四四年にはその総てを統括する立場にあった。

社主がなぜ編集スタッフに加わっていたのか？『タイム』はエール大学時代の友人ブライトン・ハッデン（Britton Hadden）との共同作業として発刊した雑誌である。ルースとハッデンは大学在学中から『エール・デイリー・ニュース』という大学新聞の編集に携わっていた。一方、この『フォーチュン』はルースの独創による雑誌であった。『フォーチュン』こそ彼が一番愛着を持っていた雑誌だったのである。ルースは書き手と編集者の壁を取り払い、テーマごとに取材、執筆、編集までを一貫して担当する「エディトリアル・スタッフ制度」を作り上げ、取材者が最後まで責任を持って、テーマを掘り下げるシステムを確立した。四六歳という働き盛り、血の気の多いルースが、自ら望んでエディトリアル・スタッフとして現場の編集に加わっていた。他の編集スタッフのひんしゆくを買いながらも、ルースは強引に編集部に入り込み、ガルブレイスの原稿に目を通していたのだろう。エネルギーシユなルースが原稿に手を入れている姿が彷彿としてくる。ルースにとって、ガルブレイスはまだ駆け出しであり、ジャーナリストとしてはヒヨッコに過ぎなかった。

大平洋戦争も末期に近い一九四四年九月には、ルースは自ら『フォーチュン』の主筆（EDITOR-IN-CHIEF）となり、これまでの編集者横並び体制（Board of Editors）を改めてくる。発行人（PRESIDENT）ロイ・E・ラーセン（Roy E. Larsen）、編集長（EDITORIAL DIRECTOR）ジョン・ショウ・ビリングス（John Shaw Billings）というラインによって、この雑誌の指揮・命令系統を明確にした。

ルースは一八九八年、中国山東省遼東で、長老派教会の伝道師の

息子として生まれた。彼は高校に入るために帰米するまでの少年期を中国で過ごしている。父はキリスト教を布教するかたわら中国の貧困を救わねばという使命感を持っていたようだ。

ルースが一四歳で中国を去った翌年、第一次世界大戦が始まり、日本軍は山東半島に上陸し、青島を占領するとそのまま居座り、翌一五年、対華二十一カ条要求を突き付け、中国に対する強圧的姿勢を強めていく。中国の貧困を目の当たりにしたルース少年にとって、日本は中国の近代化の前に立ちほだかる大きな壁にみえた。日本を中国の侵略者とみなし、アメリカを世界平和の安定に寄与する国とする。これが、少年期の原体験から生まれたジャーナリストとしての姿勢だった。

ルースの原点をエール大学在学中に書いた論文にみる事ができる。

まず、何よりもアメリカの利益が尊重され、地球全体に影響力を持つ存在となり、恵まれない国を救い、世界の平和を掻き乱すものには容赦なく立ち向かうことだ。そうすれば、今世紀アメリカは栄光と名誉を手にするだろう。

それはアメリカ覇権主義の肯定であり、モンロー主義との訣別ともとれる。二〇世紀、アメリカはルースの予言通り、地球上のほとんど総ての戦争に関与して来た。

一九二三年三月、ルースとハッデンは、『タイム』創刊号を世に出す。発行部数は一万二千部であった。その創刊趣意書には「ニュースの中立を守るのとは不可能であり、編集者がニュースに対してある

種の偏見を持つことを恐れてはならない」とある。これは『タイム』をオピニオン・リーダー誌とすることを宣言しているようにもとれる。やがて、『タイム』の挑戦的な論調は支持を得て、発行部数は五年後に二〇万部を超えた。ルースとハッデンは時代の寵児となったのである。

この頃、後に大統領となるローズヴェルトが『タイム』誌の論調を非難する手紙が残っている。『タイム』は偏向して事実を伝えていないと言っ趣旨のものである。これに対してルースも反論しているが、やがて、この対立は大統領とメディアの帝王という関係でもう一度再燃することになる。

二〇世紀のアメリカの対アジア政策は、日本と中国に対する軸足の置き方、そのバランス・シートで揺れていた。ルースは完全に中国側に軸足をおいていた（少なくとも毛沢東の中国共産党を脅威と感ずるまでは）。それが一連の『フォーチュン』日本特集号に色濃く反映されたとみるべきだろう。彼の少年期を過ごした中国の国土と人民を蹂躪する大日本帝国。ルースは日本の侵略行為を看過することが出来なかつた。彼はメディアを通して、反日キャンペーンと中国支持の論調を張り続けた。

一緒にタイム社を興したハッデンが二九年急死し、ルースはひとりでタイム社を背負う運命となった。二〇年代末、大恐慌の嵐が吹き荒れ、アメリカ経済の崩壊を目撃したルースは、三〇年、経済専門誌『フォーチュン』を創刊した。企業のトップをターゲットに、紙質も極上のものを使い、グラフィックスを重視した。ルースの狙いは適中し、一ドルという値段にも関わらず雑誌は売れた。その定

期購読者の半数以上が大企業の経営者であった。ルースはアメリカ企業・経済界に影響を与えるメディアを得たのである。ガルブレイスはルースについて次のようにも語っている。

彼は古い意味での帝国主義者ではなかったが、アメリカが他の国々に君臨することを望んでいた。特に彼の雑誌が世界に影響を与えることを望んでいた。彼は彼の雑誌と会社を道具のように使った。彼の言うところのアメリカの世紀を実現することを図っていた。

三二年三月、日本は「溥儀」を皇帝とする満州国傀儡政権を樹立。蒋介石の国民政府と毛沢東の共産党が内戦状態に入ると、その混乱に乗じて、権益を拡大する日本に対し、中国では抗日運動の嵐が起きた。

三六年の『フォーチュン』日本特集号刊行後、三七年に日中戦争が勃発する。『フォーチュン』、『タイム』、『ライフ』は、日本の侵略行為と日中戦争に至る経緯を詳細に報道した。ルースは、日本と手を切らず、大恐慌の後始末に追われるローズヴェルト大統領の対外政策に苛立ちを覚え、全社を挙げた反日キャンペーンに乗り出す。『ライフ』が載せた写真で日本の爆撃の後で、独り泣き叫ぶ中国人孤児の姿は、全米に衝撃を与えた。

こうしたタイム社のキャンペーンもあって、アメリカの対日感情は急速に悪化した。ルースは「中国救済連合」を纏め挙げ、六万ドルを寄付するとともに、タイム社から腕利きの宣伝員を「連合」に派遣する。

蒋介石は、妻の宋美齡の兄で国民政府財政部長を務める宋子文を

ワシントンに送り込み、ロビー活動を通して反日キャンペーンを展開した。『タイム』や『フォーチュン』で紹介され知名度のある宋子文はローズヴェルト政権と接近、一億ドルの対中国援助を引き出すことに成功。援助額はその後も増え、アメリカは大平洋戦争終結までに対中国に計三億八千万ドルの支援を行った。現在に直すと三百億ドルを越す額である。その陰には華僑ネットワークの力があつたことも見逃せない。

大平洋戦争中、メディアを掌握して中国を支援し、反日を主張するルースと対日戦争の勝利に向かって、国民の意志統一を図るローズヴェルト大統領の思惑は一致する。二人の間には、この経緯を証明する書簡が残されている。ルースは蒋介石の妻である宋美齡をアメリカに招き、中国支持のキャンペーンを展開した。『タイム』の最高経営責任者であったアンドリュー・ハイスケル (Andrew Hyskel) は「ルースは、宋美齡こそ中国の広告塔だと考えていた。事実、彼女はその通り魅力的な女性だった」と語っている。美しく魅力に満ちたファーストレディは連邦議会で演説し、アメリカ国民の心を捉えることに成功し、膨大な寄付金を手に入れたのである。

四四年四月号の『フォーチュン』に戻ると、ガルブレイスの証言によれば、政府筋が日本特集を出版して欲しいとルースに要請したのだという。政府筋とは何を指すのかは定かではないが、戦時情報局OWIと推測される。

「フォーチュン・ウイール」(編集者のコラム)は、「戦時であり、紙を節約しなければならぬので、発行部数も十分とはいえない」ことを詫びた後、その間の事情を次のように説明している。

〈四四年四月号〉

本誌が、日本特集号を組むのはこれが二度目である。最初の特集は三六年九月号で、『フォーチュン』は二人の記者を日本に特派した。彼らは七週間日本に滞在したが、取材は制限され、重工業のプラントは取材も写真撮影も禁止された。この日本特集号は、天皇を扱った記事が不敬罪にあたるとの理由から、日本では発禁処分となった。アメリカが戦争に突入して以来、当社には政府筋や対日軍事諜報を専攻する学生から、この特集号を手に入れないというリクエストが殺到した。日本に関する公的情報を流す必要性がかってないほど高まったのである。一九三六年出版の日本特集号も高い評価を得たのだから、どうしてそれを今日的な記事に組み直して再版しないのかという声があった。それ故、今度の日本特集と前回の特集は、類似した箇所があるのは承知の上で、その上に新情報を発掘して付け加えたものである。

三人の日本人アーティスト

一九四四年四月の『フォーチュン』の編集には、三人の日本人アーティストが関わっている。タロー・ヤシマ、ヤスコ・クニヨシ、ミネ・オオクボである。敵国の映像が入手できないのでグラフィックを絵でカバーしようとする試みであった。「フォーチュン・ウィール」は彼らを次のように紹介している。

〈四四年四月号〉

本誌の素描や絵画は日系人の画家の手になるもので、中でも主要なものヤスコ・クニヨシ（国吉康雄）の作品であり、クニヨシは日本軍の残忍性を怒りを込めて描いている。

「二世、二世、帰米」の章のイラストはミネ・オオクボによって描かれたもので、四二年に日系人が隔離収容所に入れられた時、彼女はユタ州のトバース収容所に送られた。スケッチはその時のものである。表紙はタロー・ヤシマ（八島太郎）の手になるもので、彼は日本では危険思想の持ち主として投獄され拷問にあった後、アメリカに逃れて来たというキャリアの持ち主である。

この三人の日本人アーティストはどのような人物で、どうして『フォーチュン』の編集に関わるようになったのか？ 彼らの足跡を辿ってみよう。

国吉康雄（一八八九～一九五三）

国吉康雄は三人の中では一番良く知られた画家である。二〇〇四年四月、没後五〇年の回顧展が日本の国立近代美術館で開かれた。代表作が網羅され、国吉がアメリカ近代美術の巨匠であることを彷彿させる回顧展であった。が、『フォーチュン』に掲載された「日本軍の残忍性を怒りを込めて描いた」素描の展示はなかった。あるいはキュレーターが意識的に外したのかもしれない。



国吉康雄 (1889~1953)
「カメラを持つ自画像」1924年
メトロポリタン美術館

国吉の「赤子を銃で突き殺す日本兵」の素描にある日本兵の蛮行は実際にあつたことである。戦後、フィリピンのキリノ大統領（モンテンルパの日本人死刑囚を恩赦で釈放した）のファーストレディ役を務めた大統領令嬢が、フィリピンに上陸した日本兵が母を機関銃で撃ち殺した後、母が抱いていたまだ生きている妹を空に放り上げて銃剣で刺殺したことを目撃したと証言している。アメリカにはこうした日本兵の蛮行が伝えられていたのだろう。国吉は怒りを込めてそれを絵にしたものと思われる。



国吉康雄 赤子を銃で突き殺す日本兵
『フォーチュン』の素描画から

『フォーチュン』に参画した時、国吉はアメリカ国籍を持っていない。日本人としてアメリカに滞在していた「居留」に過ぎなかったが、すでにアメリカを代表する画家でもあつた。素朴派画家としてデビューした彼は、ヨーロッパの模倣ではないアメリカ美術の旗手として認められ、二九年にはニューヨーク近代美術館が開催する展覧会「一九人の現代アメリカ画家展」に選ばれている。三六年までの一五年間、「サロンス・オブ・アメリカ」の代表を務め、三三年にはアメリカ・モダニズムの美術家を輩出していた母校アート・スチューデント・リーグの教授にも迎えられている。



国吉康雄
「誰かが私のポスターを破った」1943年

国吉に「誰かが私のポスターを破った」という作品がある。「フォーチュン」に関わる前年の四三年の作で、破られたポスターの前に、物憂げでどこか退廃的な女性が描かれている。

破られたポスターは友人であるユダヤ系画家ベン・シャーンン（Ben Shahn）の作品で、「われわれフランス労働者は警告する」という題がついていた。この絵からは読み取ることが出来ないが、原画には「服従は隷属、飢餓、死を意味する」という文字が描かれ、ドイツに屈したフランスのヴィシー政府（ペタン政権）への抗議を現わしたポスターである。ヴィシー政府は第二次大戦中、ナチスに協力してユダヤ人を排斥した傀儡政権で、ベン・シャーンンは、このフランスの過ちを繰り返すことのないようにと、フランス労働者がアメリカに対し警告を発しているポスターを描いてファシズムに屈するなど訴えたのである。

国吉はそのポスターを誰かが破いてしまったという状況を構図として作り出した。真珠湾攻撃から敵国日本人が憎悪の対象となっていた時期である。憂いに沈んでいる女性は彼の化身なのかもしれない。

い。

破られたポスターの後ろには、彼のもうひとつのモチーフである空飛ぶ少女が描かれている。落書きされたようなこの少女は、国吉がフランスで見つけたサーカスの少女であり、彼の作品では自由の象徴として登場する。国吉がこの少女に未来への希望を重ねていたことは明らかである。

逆に、ベン・シャーンンには、国吉のポスターを取り込んだ「われわれは、自由世界のためにたたかう」という作品がある。この絵は左から言論弾圧、飢え、隷属、拷問、虐殺を示す五枚の素描がレンガに張られて、その下に「We FIGHT for a FREE world!」とこう文字が描かれている。その拷問の素描が国吉のもので、国吉が戦時情報局OWIから依頼されて描いたポスターの一枚であった。ベン・シャーンンは国吉とほぼ同じ時期に戦時情報局に勤務していた。

国吉と戦時情報局との間で交わされた一五通の手紙が残っている。それによれば、OWIは「敵である日本人を描くことを求め、具体的には残忍な拷問や虐殺の場面を指定した」（川島一穂『ヤスオ・クニヨシの時代と芸術』）という。国吉はその一つとしてこの拷問の素描を描いたのだろう。「情報局に提出して採用されなかった素描の中には、空中に放り上げた赤ん坊を銃剣で突き刺す日本兵、女性の死体に突き立てた拳銃に日の丸が翻っているといった残忍でただ不快感を覚えさせるものがあるが、これは幸いにも情報局には採用されなかった」（山口泰二『アメリカ美術と国吉康雄』）から）ようだ。「フォーチュン」に掲載された「赤子を銃で突き殺す日本兵」は情報局で没にされたものを流用したものと思われる。

四二年、ダウンタウン画廊で開かれた国吉回顧展は二五セントの入場料を取り、それをルースが主宰する「中国救済連合」に寄付し

ている。中国救済、反日キャンペーンを張るルースと国吉には接点があった。回顧展の初日、国吉は『ヘラルド・トリビューン』のインタビュに応え、「東京を空爆せよ」と主張したという記事が残されている。

四二年の二月と三月、国吉は日本向け短波放送で戦争反対を訴える。二月の放送は、「パールハーバーのあなた方の恥ずべき攻撃が、アメリカ国民の怒りを惹起させた。日本の軍閥は人類の敵であり脅迫者である。われわれは美術家として、人間として、アメリカの国家防衛を支持する。あなた方がその文化遺産や文化を保存しようと思うなら傍観者であってはならない。」という趣旨のものであり、三月の放送では、「日本の皆さんが軍部を葬り去る時がきたら嬉し」と結んでいる。同年四月には、西海岸の民主主義日系人委員会で講演し、「日本人のみで殻に閉じこもり、日本語で話し、日本語新聞を読み、母国政府の思惑で共同体社会をつくっている日本人社会はアメリカ社会に同化できない。今こそ民主主義の戦いに共鳴する態度を取るべきだ」とも訴えている。

国吉は四二年四月八日に美術学校で開かれたダンスパーティーでドイツからの亡命画家ジョージ・グロス、イタリア生まれの画家ジョン・コルビーノとともに、ヒトラー、ムッソリーニ、昭和天皇という自国のファシストのカリカチュアを描くという余興を演じ、三人がそれぞれの前の立った写真が『タイム』誌に掲載されている。

パールハーバー以後、国吉のとった矢継ぎ早の行動―戦時情報局への協力、回顧展の中国救済連合への寄付、対日プロパガンダ放送、西海岸で孤立する日系人社会を批判したスピーチや『フォーチュン』に掲載された日本軍の残忍な素描画などは、いささか常軌を逸しているようにみえる。しかし、そう決めつける前に、こうした行動に

駆り立てた状況や彼の心情について思いを致すべきであろう。

国吉は、自分を合衆国を代表するアーティストとして認めてくれたアメリカを愛していた。アメリカ人に成り切りたいとも願っていた。だが、合衆国の法律が彼をアメリカ人とすることを拒んだのである。パールハーバー以後、アメリカを代表するアーティストでありながらも国吉は「敵性外国人」であり、彼の愛する国家からは「敵」とみなされていた。国吉は日本人でありながら、「アメリカ国家に対する忠誠」を証明する必要があるためである。

国吉のアメリカでの足跡を振り返ってみよう。単身アメリカの土を初めて踏んだのは一九〇六年七月。岡山県立工業学校を二年で退学し、一七歳での渡米であった。父の職業ははっきりしないが、家庭が裕福ではなかったことは確かである。一人っ子の彼が何故アメリカを目指したのか？ 彼の回想録には「軍隊か、アメリカか、二者択一を父に迫ったら、アメリカへ行けと言われた」というコメントがある程度である。

その頃、アメリカは中国人に代わる農業労働者としてアジアからの移民を求めていた。一方、日本は日露戦争に勝利したものの、財政事情は悪く、出稼ぎとしての移住は魅力的だったろう。あるいは、徴兵逃れのためか、一獲千金を夢見ての渡米だったのか詳らかではない。

アメリカに渡った国吉は、ロサンゼルス郊外で葡萄の収穫など農業に従事するかたわら公立学校に通った。年齢を三歳若く偽って入学した学校は、授業料なしで英語を学習するのに好都合だった。英語の話せない国吉は、意志の疎通を図るために絵を描いた。その絵の上手さに舌を巻いた教師は、彼に画家になることを奨めた。失うものは何もない国吉はロスのスクール・オブ・デザインの夜間に

入学し、絵の勉強を始めた。

一九一〇年、ニューヨークに移り、進歩的な美術学校であるインディペンデント・スクール・オブ・アーツに入学する。ここで、アメリカ最初の抽象画家となるスチュアート・デイヴィス等と親しくなる。一六年、アート・スチュアート・リーグに入り、進歩的芸術家と交わり、一七年、独立美術展初出品。

国吉はアート・スチュアート・リーグで認められていたようだ。貧乏な彼は学費を免除されている。そんな彼を同じ画学生でユダヤ系アメリカ人キャサリンは愛した。一九年、学友のキャサリン・シュミットと結婚。アメリカ国籍を持たない国吉と結婚することからは、キャサリンがアメリカ国籍を失うことであった。国吉はアメリカ国籍を取得することを強く望んだが、生涯それを手にすることはなかった。

八島太郎（一九〇八～一九九四）

雑誌『フォーチュン』四四年四月号の表紙と「ある平均的日本人 H・フジノの場合」の章の挿し絵を描いたのは八島太郎である。編集者の前書きは次のようにタローを説明している。

〈四四年四月号〉

タロー・ヤシマは合衆国における最高の書家の一人であり、彼の時事漫画は、日本では危険思想として長い間有罪扱いされ、一回も投獄され、拷問にもあっている。一九三九年にアメリカに逃れ、昨年『新しい太陽』(The new sun)という著作を出版している。それは白黒の絵にコメントが付き日本の反ファシストに何が起きているのかを綴ったものである。

この八島太郎の半生については、大宅壮一ノンフィクション賞を受賞した『さよなら日本』（一九八二年晶文社）に詳しい。著者の宇佐美承（一九二四～二〇〇三）は、朝日新聞の記者から『朝日ジャーナル』副編集長などを歴任したノンフィクション作家である。彼は幼い頃に神戸で絵を習ったことのある八島太郎に興味を持ち、本人とも会い、その足跡を纏め上げた。これから紹介する八島の足跡は、宇佐美承『さよなら日本』から抜粋した。

八島太郎という名前は、八島日本、太郎男児というペンネームで、本名は岩松淳という。一九〇八年、太郎は大隅半島の根占（ねじめ）という村に鹿兒島郷士の末裔として生まれた。少年期を鹿兒島で過ごした後、画家を志し、美校（現東京芸術大学美術学部）に入学するが、プロレタリア美術運動に走り、放校（除名）される。宮本百合子と親しく付き合ったり、小林多喜二のデスマスクを描いたりもしている。彼の諷刺マンガは左翼ジャーナリズムから評価されていたが共産党員ではなかった。何度も投獄され、東京でのプロレタリア美術運動の最中、同じ志を持つ画家志願の光子と結婚。光子は妊娠中に獄で拷問を受け、脊椎を傷めながらも男児を出産した。その子が俳優マコ・イワマツ氏である。マコは戦後両親に招かれてアメリカに渡り、国籍を取得、軍隊に入った後、俳優として活躍し、『砲艦サンバプロ』では中国人の苦力を演じ、アカデミー助演賞にノミネートされている。凜々しいマスクを持つ俳優である。

八島太郎というペンネームを使った理由は、戦時中に日本に残した息子がスパイの子として迫害されることを恐れたからだだと後に述懐している。実は、太郎には光子と結婚する以前に、別の女

性との間に一人の男児をもうけている。その子が『逆転』で大宅壮一ノンフィクション賞を得た伊佐千尋氏である。

投獄され、拷問を繰り返された果てに、思うように芸術活動の出来ない太郎は、神戸の光子の生家に身を寄せ画塾を開く（宇佐美は少年期にこの画塾に通ったことが『さよなら日本』を執筆する動機となった）。光子の父親はこうした二人の生き方を認めていたのだろう。彼らをアメリカへと脱出させた。

マコを父親の家に預け、一九三九年三月、二人はニューヨークのイーストリバーの貧民街に落ち着き、絵の勉強を始める。太郎は移民局に嘆願書を書き、滞在期間三年のビザを取得してアート・スチューデント・リーグに通う。安アパートの一室で貧乏暮らしに耐えながら、太郎は日本での夫婦の受難の物語『新しい太陽』を絵入りで制作、光子は英文作成を手伝っている。四三年一月に出版された『新しい太陽』は、太郎のヒューマニズムが躍如としており、ニューヨーク・タイムズをはじめ各紙が絶賛した。「日本人にもまともな人間がいる」、「日本人は複雑で不可解という定説を覆した」。これが転機となり、太郎のもとにファンレターや講演依頼が舞い込み、放送局が彼の半生をラジオドラマ化した。

宇佐美 承 『さよなら日本』から

太郎が『フォーチュン』に関わるのはこの時期であった。フォーチュン編集部もその評判や諷刺画の出来は知っていて、日本の事情を分かっている太郎に表紙や挿し絵を依頼したのである。以前にも、太郎は諷刺画『ミスター・トージョー・オブ・ジャパン』を描いて、自ら『ライフ』誌に持ち込んだことがあるが、その時はにべもなく掲載を断られている。ライフの編集者は、祖国を敵にまわすような

絵を描く日本人画家の心中を図りかねたのかもしれない。

その後、太郎は大統領直属機関であるOSS（戦略事務局＝Office of Strategic Services）という諜報機関で働くことになる。現在の中央情報局（CIA）の前身である。OWIとOSSの違いは情報と諜報である。OWIが前線の敵兵や敵本土にむかって放送や文書で公然と働きかけるのに対して、OSSはひそかに敵に浸透して、内部かく乱を起こす戦法をとる。たとえば、日本の週刊誌に数ページではあるが、厭戦気分を起こさせるような記事や写真のせた文章を挟み込み、日本の雑誌の体裁のまま前線の兵士に読ませる。あるいは、あわよくば本土に持ち込むのである。太郎は、そこで日本兵向けの宣伝ビラを作る。ビラには故郷の山河、田畑で帰りを待つ母子と、「死ぬばかりが人間の道ではない。死ぬな！耐えろ！機会を待て！」あるいは「敵は誰だ。軍部ではないか！」という文字が添えられていた。太郎の持つて生まれたヒューマニズムに彩られたビラと言って良い。

ミネ・オオクボ（一九二二～二〇〇二）



ミネ・オオクボ（1912～2001）

収容所で描いた自画像

後ろの落書きは「ジャップはジャップだ」「ジャップに気をつけろ!」「ジャップはこんな顔」「ジャップはいらない!」「スパイ」などと読める。

「二世、二世、帰米」と「市民生活」、「戦後の対日処理」という三つの章のイラストにはミネ・オオクボの作品が使われている。彼女は国吉や八島と異なりアメリカ国籍を持ち、アメリカで高等教育を受けた二世である。

ミネ・オオクボは一九二二年、カリフォルニア州に生まれた。父はアメリカに渡った一世であり、職業は庭師（ガーデナー）は技術を要し、給与も高い。日系人が多かった）であった。母は日本の美術学校を卒業して渡米した後に結婚、ミネを含めて七人の子を産んでいる。ミネは母の勧めで好きな美術を専攻し、三六年にカリフォルニア大学バークレー校で美術の修士号を取得している。三八年には奨学金を得て、ヨーロッパに留学したが、第二次世界大戦の勃発で

帰米を余儀なくされた。帰国後、サンフランシスコ美術館において四〇年、四一年と二回にわたり個展を開いている。美術家として順風満帆のスタートであったといつてよい。四一年二月一九日「大統領令9066号」が発令され、西海岸における日系人の立ち退きと、次いで強制収容が始まって、彼女の生活は一変する。母は戦争直前に亡くなっており、父はモンタナ州へ、姉はワイオミング州のハート・マウンテンに収容され、兄は徴兵されてオオクボ家は離散した。ミネにも「13660号」という認識番号が交付され、タンフォラの集合センターに収容された。もともと、すでに画家として認められており、収容を避けて、東部への移住を選択することもできたのだが、彼女は独り見知らぬ東部へ行くことをためらい、タンフォラの集合センターを選んだ。そこで、彼女は大学時代の恩師であるチウラ・オバタと出会う。オバタは集合センター内で美術学校を設立していた。ミネはインスタラクターとして学校を手伝い、絵の指導にあたっていた。生徒数は六百人程で人気のある先生だったという。その後、トパーズの転住センターに移った彼女は『トレック』という小雑誌に収容所生活を描いたペン画のスケッチを載せる。それが日本特集号を企画し、収容所をレポートしようとしていた『フォーチュン』の編集者の眼にとまり、ニューヨークへと呼び出されたのである。一九四四年四月号の『フォーチュン』の前書きにはその経緯が次のように書かれている。

（四四年四月号）

彼女はアメリカ生まれ、カリフォルニア芸術大学のM・A（芸術修士課程終了）で、サンフランシスコ美術館で数回個展を開いている。四二年、日系人が収容された時、ミネ・オオクボもタン

フォランの軍収容センターに六カ月収容された。その後ユタ州の砂漠にあるトパーズ収容所に送られ、一六カ月を過ごした。そこで、彼女は収容所で発行された手製の小雑誌『トレック』のアーティスト・スタッフになる。その『トレック』のコピーをフォーチュン・アート・エディター達が見つけた。ミネ・オオクボの絵は、最初はヨーロッパやアメリカの友人にあてた絵葉書であったが、それはユーモアと辛辣さを伴った観察力に溢れ、また、客観性にも富んだものであり、我々の目的にかなっていたし、まだトパーズに収容されていた。彼女は『フォーチュン』のスタッフの誘いで収容所を抜け出し、二三五枚の画を携えてニューヨークにやってきました。その画集から我々はさらにビックアップした。それに加えてミネ・オオクボは「市民生活」の章と「戦後の対日処理」の章の絵も描いている。

オオクボには戦後、コロンビア大学から出版された自著『市民一三六〇』がある。収容所のスケッチを主体とした著作であるが、その序文で『フォーチュン』のデボラ・カーキンス (Deborah Calkins) に謝意を表している。カーキンスの名は四四年四月号『フォーチュン』の編集者一覧の中にアート・アンシエーツとしてあることから、ミネ・オオクボのイラストを選んだのは、カーキンスだと思われる。『フォーチュン』のバックナンバーを辿ると、四三年一二月号『フォーチュン』の記事「東京への道」の中に、すでにミネ・オオクボのスケッチが掲載されている。図柄は神社に手を合わせる日本人と戦場で死んだ日本兵士を描いたものである。したがって、ミネ・オオクボは、出所以前から収容所内で『フォーチュン』の挿画を描いていたことになる。この二つから推理すると、『フォーチュン』の

記者が四三年の秋から冬のある時期トパーズの収容所に取材に赴き、ミネ・オオクボの存在を発見し、コンタクトしたものとと思われる。

雑誌『フォーチュン』の招きで、自分の描いた二三五枚のスケッチを確りと抱えたミネ・オオクボは、晴れて「ジ・アウトサイド」(出所を許可されたものを収容所ではそう呼んだ)として、トパーズからニューヨークへと向かった。その出所の光景をミネ・オオクボは『市民一三六〇』に描写している。

入り口に集まっている見送りの人々。この収容所にはいまや老人と若過ぎる人々だけが取り残されている。私は思った。「何としたことだろう。この哀れな人々にとって、自分の家と呼べるものはここにしかないのだろうか。この人々はどこやってここを出て、どこに行こうとしているのだろうか。」

別れの手を振るうちに、込みあげてくるものをやつのことで胸に抑え込んだ。私はバスに乗った。収容所のバラックが遠く砂埃の中に消え去るまでの間。走馬灯のように収容所の体験が脳裏をよぎった。今や砂漠だけが拡がっている。私の思いは過去から未来へと向かおうとしていた。

第三章 「一世、二世、帰米」

映画『ゴッドファーザー』は、イタリア系三世のフランシス・F・コッポラ監督作品であるが、マフィアの裏に隠されたもう一つのテーマは、アメリカ国家のマイノリティに対する暴虐である。イタリア系移民ですら、そうであるとすれば、アジア系マイノリティに対するそれは如何ばかりなものであつたのだろうか？

三六年の『フォーチュン』に於て、四四年の『フォーチュン』で大きく誌面が割かれたのが「一世、二世、帰米」の章である。カリフォルニアに住む日系人が「戦時敵国人強制収容所」に収容されたのは、真珠湾攻撃の翌年の四二年からであり、四四年四月の日本特集号がこれをトップに据えたことは頷ける。

「一世、二世、帰米」の章では、収容された日系アメリカ人の生活が、前章で紹介したミネ・オオクボの絵とともに綴られている。彼女が描いた収容所の生活はどのようなものであつたのだろうか？ この『フォーチュン』の記事は、ジャーナリズムが「戦時敵国人強制収容所」に入り込み、本格的にレポートした最初のものといえる。

日系人排斥の立法と米ジャーナリズム

アメリカでの日系人排斥の経緯とそれを報道した米ジャーナリズムについて簡単に触れておきたい。

日系アメリカ人を一皮むけばWASPであるという言い方はほぼ正しいといえよう。少なくとも太平洋戦争開戦までは日系人はアメリカで成功していた。移民の流入は明治二四年から始まり、大正一三年の実質的に日本人の移民を禁じた「移民に関する連邦法案」が議会を通過するまで絶えることなく続いた。その時期の移民が「一

世」である。彼らの多くが農村（広島、熊本、和歌山、福岡、山口県など）の出で、若く、学歴は小学校か高等小学校卒業であつた。一世はカリフォルニアやハワイで農業従事者として働くか、日系人に雇われたり、自営の小規模店を経営して生計を立てるなど相互依存の傾向が強かつた。

一九世紀末、最初にアジアから移住した中国人を排斥する法律が次々と成立し、中国人の代替要員として日系人の移住が本格化する。先住のヨーロッパ系移民にとつて勤勉な中国人労働者は職を奪う危険な存在であつた。また、自分たちの社会の中だけで群れる異文化の黄色人種は無気味でもあつた。チャイナタウンは襲撃され、中国人に対するリンチや虐殺が繰り返された。こうして追放された中国系移民の穴を埋める労働力として日本人は歓迎されたが、それも長くは続かなかつた。理由は中国系移民と同じく、日本人も勤勉であり過ぎ、自分たちだけで群れたからである。

一九〇八年（明治四一年）の紳士協定により、日本政府は自主的に日系人の移住を制限する措置をとつた。それにより、一九〇八から一三年に入植した日本人の数はそれまでの三分の一に激減した。一九一〇年、『サンフランシスコ・クロニクル』は次のように書いている。

日系労働者が、アメリカの市民権とか、産業の開発の面で先んじようとする野心を抑えることができたなら、おそらく一般大衆の注意を喚起することもなかつたであろう。日系人の野心は単なる従属状態を超えて、アメリカ人労働者の上流階級にまで達し、彼らと同じような家を持つことであつた。この状態が実現した瞬間に日系人は理想的な労働者ではなくなる。

ヨーロッパ系の先住民が望んでいた日系人とは汚い仕事を安い給料でこなす下級労働者であった。しかし、日系人は下級労働者から、急速に経済的コンペティターの地位にまでの上昇がてしまった。そして、一九〇五年にバルチック艦隊を海の藻屑と葬り去った日本は、「白人」を撃ち破った只一つの有色人国家でもあった。無気味なことに、日系人の背後には強大な軍事力も見え隠れしていたのである。カリフォルニアの有力紙『サクラメント・ビー』の一九一〇年五月一日の記事を紹介する。

まあ、ジャップというのは、ずるい悪賢いやつだよ。ジャップは嫌だね。白人より文明の程度は低いし、われわれとは同等には絶対なれない。やつらには節操がない。ジャップの女が六人の男と一緒に寝ているのをみたことがある。ジャップを信じるものは誰もいない。

もちろん、イエロージャーナリズムの取るに足らぬ記事ではあるが、意識の底にある日本人に対する嫌悪感が現われている。

一九一三年、カリフォルニア州で外国人土地法が成立する。これによって、日系人は最高三年間しか農地を賃借することができず、既に所有していた土地も相続ができなくなった。この土地法は日系人を農業から閉め出すことを目的としていた。立法の裏には、土地を取得できなければ、日本から大勢やってくることもなからう。活動の機会を制限すれば、彼らはいなくなるだろうという計算があった。

ところが、第一次世界大戦の勃発で、農産物への需要が高まり、アメリカはこれまで以上に農業従事者を必要とした。その結果、外

国人土地法の成立にも関わらず、日系人の農業従事者は増加の途を辿り、その多くが農園を持つまでに至った。

戦争が終わるとまた反日系人感情に火がつく。一九二〇年には外国人土地法が改正され、今度は農地を賃借する権利を日系人から奪った。しかも、「二世」が所有した財産をアメリカ生まれの「二世」に引き継げないとする差別的な内容を持つ法律であった。一世たちは外国人として市民権の取得、土地所有や賃借の権利を否定され、絶え間のない迫害の中に身を置いて、苦勞して貯えた資金を農地に投資することをためらった。しかし、それでも、カリフォルニアでは日系人は農業にしがみついていた。それが反発を招いた一因でもあったのだが、日系人は狭い耕地を耕した経験から、集約農法で野菜を生産する方法に長けていた。

日系人は農業の他にも雑貨を扱う小さな店やクリーニング店、理髪業、ドラッグ、食堂やコーヒーショップなど日本人相手の店を経営し、そこは日系人の溜まり場ともなった。そして、周囲の日系人排斥運動が拡大するほど、逆に集団の連帯は強固なものとなっていった。

もう一つ日系人に適した職業に庭師があった。ガーデナーである。芝の手入れ、生け垣の刈り込み、草花の植え付けは熟練した技術を要し、給料も一般の使用人よりは高かった。こうした職業に従事しながら、一世は自分の子どもに高い教育を受けさせ、より高い社会ステータスを求めようとした。ミネ・オオクボの父も職業は庭師で一世の典型であった。

「二世」の多くは、一九一〇年代から四〇年までの間に生まれている。アメリカで生まれたものにはアメリカの市民権が与えられる（今、韓国人がツアーを組んでアメリカ出産を企画するのは国籍取

得が目的で、ツアーは大はやりだという)ので、二世は皆アメリカ市民権を得ており、市民の義務として兵役にも従事した。彼らは一世の教育に対する考え方から、しっかりと教育を受けて育った。二世の多くは正規の学校が終わってから、日本語学校に通い日本語や日本的な倫理観、道徳律を身につけることを求められた。二世の中には、日本に戻って高等教育を受けるものもいて、こうした二世は「帰米」と呼ばれた。

一九二四年、各国からの移住者数を規制する連邦法が可決された。この法案の目的はアジアからの移民全てを締め出すことであったが、中国人の移住はすでに禁じられていたので、「市民権賦与の適格性を有しない外国人を排除し」という条項は、日系人の締め出しを意味していた。

黄禍IIイエロウ・ペリル

四四年四月の『フォーチュン』に戻ろう。この「二世、二世、帰米」の章では黄色人種の危険性を指摘した『ハースト』について次のように論評している。

〈四四年四月号〉

ハースト新聞社は、州人口の1%の黄色人種の危険性、ならびに何時か彼等が戦争を仕掛けてくるであろう海の向こうのイエロウ・ペリル(黄色人種の危険性)について、この一〇年、キャンペインを張り続けてきた。それが真実となり、この新聞の日系人に対する憎悪と恐れのカンペインは度を越えたものとなった。ハースト紙が日本人居住者全ての移動を主張すると、長年日本人の存在を憤る多くの圧力団体を同調者として獲得した。

『フォーチュン』が、反日キャンペインの行き過ぎを非難したハースト系新聞を経営していたハースト(William Randolph Hearst 1863-1951)という新聞王は寄り道にしても説明しておくべき人物である。一九六三年、サンフランシスコで生まれ、父親が安値で買った鉱山から銀が採掘されたことから、一人息子の彼も一夜にして大富豪となる。まさにアメリカン・ドリームを地で行った男である。権力欲にとりつかれたハーストは政治を志し、ニューヨーク市長、州知事を目指す。市民はこの傲慢な成金を嫌い、幾たびも落選の憂き目にあっている。政界への進出を諦めたハーストはルースと同様メディアの帝王を目指す。一八八七年、これも父親がギャンブルの質にとった『サンフランシスコ・エグザミナー』紙を譲り受けたのがその発端であった。この新聞を手にした後、ハーストは世論を操作するために全米のメディアを買い漁った。絶頂期には日刊紙二二、日曜紙一五、雑誌七、ラジオ局五を傘下に治め、「メディアの王国」を築き上げた。この王国を通じて、ハーストはアメリカの政治や世界情勢までも操ろうとしたのである。彼の新聞ではデマゴグやアジテートは日常茶飯事であった。ハーストには黒い噂が絶えることがなかったし、イエロー・ジャーナリズムを地で行くのがハースト系新聞であった。パールハーバー以後の日系人への攻撃は彼とその新聞にとっては、勢力拡張の格好な材料であった。

ハーストは第一次世界大戦前から「日本嫌い」であった。一九一六年にハーストが製作した映画『パトリア』は、『ニューヨーク・テレグラフ』の一月二〇日の映画評によれば「ハーストの方針に従ったあからさまな反メキシコ、反日本」映画であった。愛国心に満ちた兵器工場を経営する一家の最後の一人である女性に、日本とメキシコのスパイが潜入し、作業員を扇動してストライキを起こそ

うと企てる。恐ろしい程の人種差別と偏見に満ちた映画であった。一九一七年、対独宣戦布告をしていた日本と米国が同盟を結ぶと、米政府筋は反日イメージが露骨な部分をカットを要求している。

ハーストはゴールドラッシュ時代の「フォーティナイナーズ」(一九四九年に西部にやって来た勇敢なものたち、サンフランシスコにその名が残る)の申し子といえる。当時は辺鄙な西部の土地で育ったハーストには、アジアから海を渡って来たアジア人は侵略者であり、黄色い禍でしかなかったのだろう。彼はオーソン・ウエルズの映画『市民ケーン』のモデルでもあった。

ハーストとルースという二〇世紀のアメリカに君臨した二人のメディアの帝王が、揃って日本を嫌ったことは、日米関係にとって不幸なことであった。

真珠湾攻撃の直後から、ハースト紙のキャンペインはさらに過激なものとなった。「日系人二一九二人を含む敵性外国人がFBIに逮捕された。日系人には第五列(スパイ)による逆行行為の懸念がある」と報道している。四二年一月二十九日には、ハースト新聞は、「イエローペリルについてヘンリー・マクレモアの次のような署名記事掲載している。

私はすべての日系人を直ちに西海岸から内陸の奥深く移動させたい。彼らを困らせ、傷つけ、餓えさせればよいのだ。個人的には私は日系人を好まない。彼らもそうだろう。

パールハーバーは、日系人に致命的な打撃を与えた。流言飛語が飛び交い、裏切り者「ジャップ」に対する攻撃がほとんどすべての市民から加えられ、進歩的な市民も沈黙を守るのみとなった。

西海岸地域に住むすべての日系アメリカ人は、仕事や家庭から退きさせられ、終戦まで「戦時敵国人強制収容所」に入れられた。日系アメリカ人が最多であったのはハワイ州であったが(もし、ハワイで同じことを行ったら、住民の半数が収容所に入ることになり、機能は麻痺したであろう)、本土のカリフォルニア州を中心とした西海岸で事は起きた。

『フォーチュン』誌の強制移住に関する報道

四四年四月号の『フォーチュン』は、「アメリカ史上最大の強制移住である greatest forced migration in U.S.」として、初めて日系人収容所の実態を全米に伝えた。

以下、『フォーチュン』の記事を一部翻訳・引用するが、同誌はアメリカ政府が使った用語をそのまま使用している。

「保護収容施設」(Protective custody)には三つのタイプがあり、

一、「司法省キャンプ」(Department of Justice camp)

アメリカにとって危険分子として摘発された三千人の日本人
居留者を収容

二、「転住センター」(Relocation center)

軍事上の必要から西海岸に住む日系人二万人を収容

(三分の二はアメリカ市民権を持つ、三分の一は市民権を持つことを禁じられた居留者)

三、「隔離センター」(Segregation center)

日本への忠誠心を持ち、アメリカへ忠誠を誓わないと判断されたものとその家族を収容

その他に、軍が西海岸に住む全ての日系人を集めた「集合センター」(Assembly center)がある。一時的な収容施設であり、戦時

中閉鎖されていた競馬場などが使われた。日系人はそこで一〇程のグループに小分けされて、西海岸や内陸の「転住センター」(Relocation center) へと送られた。

収容された日系人の間でも、終戦後に認識の違いから、「転住センター」(Relocation center) を強制収容所 (Concentration camp) とするものと、アメリカ政府の名称通りの「転住センター」であったとするものに分かれている。

センター内ではそこだけで通用する呼称もあった。

「コケイジエン」(Caucasian) は「ロニスト (colonist) 」とも呼ばれ、収容された日系人を取り仕切る(多くは白人の) スタッフである。

「エバキユエ、抑留者」(evacuees) は収容された日系人のことである。

「ジ・アウトサイド、出所を許可された者」(the outside) は、東部に仕事をみつけて、あるいは仕事を求めて転住センターから出て行くことを許された日系人で、多くはアメリカ国籍を持つ若い二世であった。

最初、軍事地域に指定された域内の日系人は、政府勧告による自発的退去を求められた。単に「出て行け! 」と言われたのである。日系人は、店をたたみ、家を捨て、荷造りをして東への移住を決意した。しかし、自由意志による移住は三月二七日の命令で終わり、五月二九日からは強制収容に切り替えられた。すべての退去手続きが軍によって管理された。まず、タンフォランやサンタ・アニタにある「集合センター」に一時的に集められた日系人は、次に一〇の「転住センター」(図参照) へと移された。

転住センターと収容人員の概数

カリフォルニア州	
マンザナ	10,000
ツールレーク	16,000
アリゾナ州	
ボストン	20,000
ギラ・リバー	15,000
アイダホ州	
ミニドカ	10,000
ワイオミング州	
ハート・マウンテン	10,000
コロラド州	
グラナダ	8,000
ユタ州	
トパーズ	10,000
アーカンソー州	
ロウワー	10,000
ジェローム	10,000

西海岸に住む全ての日系人を強制収容したということは、日系人全てを有罪としたことを意味する。集団強制収容、監禁、憲法上の権利の剥奪はアメリカ市民権を持つ三分の二の日系人にとって屈辱以外の何ものでもなかった。同じ敵国でもドイツ系やイタリア系移民には、このような強制収容や隔離政策は取られなかった。著名な大リーガーとして活躍したジョー・デイマジオはイタリア系移民である。彼を含むイタリア系移民を隔離収容することなどは考えられなかったのかもしれない。大リーグでの野茂やイチロー、松井の活躍は大きい。

『フォーチュン』の記事と、ハースト系新聞社によるキャンペーンや一九四二年五月九日の『サタデー・イブニング・ポスト』紙の「明日にでも日系人がどこかに移されたとしても、我々はいつこうに困らない。と言うのも、日系人が栽培しているものすべてを白人の農民が受け継いで収穫することができるからで、戦争が終わって帰って来てほしくない。」などという記事と比べてみれば、『フォーチュン』の報道姿勢は冷静で客観的である。この『フォーチュン』

の「一世、二世、帰米」の章は日本で翻訳・紹介されたことがないので、ここに抄訳を載せておく。

〈四四年四月号〉「一世、二世、帰米」

アメリカ合衆国は、現在、日系人二万人を保護収容施設にいられている

バタイン収容所でのアメリカ人捕虜に対する日本の残虐行動が暴露されると、反日感情はパールハーバーの時よりさらに激しくなった。アメリカ人はバタイン収容所の恐怖を合衆国で収容されている日本人の扱いと対比していた。合衆国では、捕虜は一日三度の食事が与えられ、棍棒でなぐられたり蹴られたり、暴行を加えられることもないのは周知の事実である。

一方、合衆国が日系人を強制収容したという事実を、日本が極東全域において執拗かつ巧みに利用し続けていることはあまり知られていない。このプロパガンダは日系人が強制収容されたということが中心であり、収容された人々がどう扱かれているかは問題にしていない。合衆国が大半はアメリカ国籍を持つ一〇万人を優に越える日系人を堀の中に強制収容した事実を再三指摘することにより、日本は極東の海外ラジオ視聴者に対し、アメリカの不当な人種差別の事例がまた一つ増えたと喧伝している。敵は全ての東洋人に「太平洋戦争は白人による人種の抑圧に対する聖戦である」ことを納得させるために、合衆国での黒人、メキシコ人、日系人というマイノリティに対する差別を鋭く指摘しているのである。

連邦政府が苦心して考え出した日系人に対する扱い方の差異については、敵は故意に説明を控えている。総人口の〇・一％のマイノリティである日系人に何が起きているかを報ずるこの日本からのラジオ放送により、アメリカ人自身も混乱させられているのが実情である。

有刺鉄線で囲われた日系人収容所には三つのタイプがある。

第一は、司法省のキャンプである。ここはFBIが合衆国にとって危険人物と判断した三千人の日本人を収容しており、ここだけが本場の抑留キャンプといえる。

第二は、合衆国には有刺鉄線に囲われた一〇のセンターがある。そこには一九四二年現在一万人の日系人が収容されている（アメリカ大陸の総日系人人口二万七千人の内）。その三分の二はアメリカ生まれの市民である。残りの三分の一が居留外人であり、彼らは法律で市民となることが禁じられている。彼らは何らかの罪で告発されたわけではなかった。戦争が起った時、この一万人は太平洋側の各州（大多数はカリフォルニア州）に居住していた。市民であるか否かを問わず、全ての日系人は西海岸から移動すべしという軍事上の理由から鉄条網の囲いの中に閉じ込められたのである。

昨年（一九四三年）のうちに、西海岸を立ち退かされた一万人は、さらに二つのグループに分けられた。日本へ忠誠を誓うものや合衆国を防衛することを望まない^{と判断された}日系人は家族とともに「隔離センター」と呼ばれる第三のタイプの収容所に送られることとなった。後は「合衆国に忠誠を誓った」日系人のキャンプであり、そのうち、一万七千人は仕事に着くため東部に移つ

たが、残りの人々は鉄条網の内側に残されている。こうした措置は、アメリカ市民を拘留するにあたって、憲法や権利の章典を侵害したとはいえないまでも、無理な解釈をしているというやっかいな問題を残した。

一九四一年一月二月の時点に戻ってみよう。西海岸に点在している日本人社会は極度に緊張していた。防衛についていえば、西海岸の長い海岸線は丸裸に近かった。港には日本人の漁業基地があり、軍事工場に接して日本人の経営する農場があり、大都市の中心には「リトルトーキョウ」という日本人居住区があった。その日本人社会の中には、スパイの疑いを掛けられたものがいて、サボタージュをするのではないかという風評も立った。しかし、カリフォルニアの住民は平静を保ち、問題の解決は政府に任すように勧告されていた。最初の二週間で、司法省は千五百人の容疑者を摘発した。その数週間後、敵国日本の（市民権のない）居留者か米市民であるかを問わず、全ての日系人はロサンゼルス港のターミナル島のような戦略上の重要拠点、軍事工場、発電所や橋の近くから排除され移動させられた。FBIが容疑者を摘発している間も、行政当局には東洋人の隣人で不審な行動をとるものについて市民から密告が寄せられていた。ワレン (Warren) 司法長官（現州知事）は四二年二月二日に「開戦以来、日系人による如何なるサボタージュもスパイ活動（第五列）もなかった」との声明を出したが、それまではヒステリックな噂が広がっていた。日本の空軍や海軍の洋上作戦やハワイでのスパイ活動についての流言飛語は、昔から、日系アメリカ人に対する敵意を抱くカリフォルニア住民の姿勢をぐらつかせ、ヒステリックにさせていた。

アメリカ在郷軍人会は一九一九年の創設以来、毎年欠かさず日系アメリカ人を排斥する決議を行ってきた。カリフォルニア農業協同組合には、この地で七千万ドルもの野菜を低いコストで栽培している日系人を排除し、競争相手を蹴落したいという理由があった。カリフォルニアの土地法では在留日系人の二世が土地を買ったり、借りることを阻止できなかったのである。都市では「リトルトーキョウ」が大きくなるにつれ、日系人はかなりの商売青果市場とかあらゆる商品の小売や卸しなどを始めていた。農業者、在郷軍人、西部の土着の人々、それに政治家たちは、日系人を憎み憤っていた。立法の記録と新聞記事が、多年にわたって日系人への敵意が醸成されていったことを物語っている。太平洋戦争が敵意を恐怖に変え、カリフォルニアが数十年にわたって望んでいたマイノリティである日系人を排除するということを可能にした。

二月の初め、ハースト紙とその支持者である圧力団体は、州を敵から守り、フィリピン人やその他の近隣者からマイノリティに加えられる暴力から守るという口実で、日系人の追い立てを声高に要求し始めた。事実、二、三の暴力ざたは起きていたし、スパイの噂話しが沿岸で拡ったりもした。

二月一三日、太平洋沿岸議員団はローズヴェルト大統領に対し、日系人排除の許可を要請し、一週間後、大統領はその権限を軍に与えた。

二月二三日、日本の潜水艦がサンタバーバラに近い海岸を砲撃した。

三月二日、海軍中将ジョン・L・デウィット (John L. Dewitt) は、アメリカ市民であるかを問わず日本人全てをカリフォルニア州の

大部分、オレゴン州の西部、ワシントン州、アリゾナ州南部から移動させる命令を発した。それは結果的にはアメリカ史上最大の強制移住となったのである。

日系人は政府に対する不信感を募らせながら、混乱のなかであつた。身廻りの始末をした。家や土地、トラクターや車などを売ったり、倉庫に保管したり貸したりした。その財産上の損失は測りしれないものがあつた。

軍は二八日間のうちに、一五の「集合センター」内に一万人の一時的な宿舍とするためのバラックを間に合わせに作つた。「エバキユエ」たちは混雑したバラックの中で、藁のマットレスを作つて、自分の居場所を確保し、新しい生活に適応しようとした。

八月一〇日までに、全ての日系人（精神病院やその他の保護施設にあるものを除いて）は、WRA（戦時移住局）が内陸に収容所を設立するまでの間、この「保護収容施設」(protective custody)に押し込められた。WRAの仕事は彼らが規律正しい落ち着きをみせるまで、彼らを管理することであつた。

WRAは西部各州の知事に収容所建設の協力を求めた。例外はコロラド州で、日系アメリカ人が州内に定着することを望まなかつたばかりでなく、如何なるセンターも軍の十分な護衛なしに州内に設立させようとはしなかつた。最終的には九つの内陸の建設用地（すべて連邦政府の所有地であるが）が見つかった（カリフォルニア州東部にある一つの集合センターはそのまま転住センターとなつた）。

西海岸に住む日系人は失つた土地や家、金、それに奪われた自由について憤りを感じていた。ドイツ系やイタリア系の第二世代の市民はカリフォルニア州で拘禁されることはなかつたし、日系

人でも他の地域に住む二世は塙の中に入れられることはなかつた。西海岸以外ではFBIが彼等を怪しいと睨んだ日系人のみが拘禁された。

WRAが造つたリトルトキーウともいふべきセンター内での団体生活に対する「エバキユエ」の憤りは大きかつたが、暴動化することは滅多になかつた。情緒面での緊張感、追い立て、そして混雑した群れでの暮らしなどを考えれば、日系人の抑制された記録は驚くべきものといつて良いだろう。秩序を維持するために軍隊がWRAの塙の中に入つたのは二度しかなかつた。

最初、禁止区域に住んでいる一万人の人々のアメリカ大陸内での移住は自由意志によるものであつた。日系アメリカ人は単にここから出て行けと言われただけであつた。三週間以内に八千人の人々が荷造りをし、店を畳み、近隣の人々に所持品を売るか、譲り渡して、おとなしく東へ向かつた。だが、アリゾナ州では、多くの日系人が州境で阻まれた。カンサス州では、警備隊が彼らを止めてしまつた。ネバダ州とワイオミング州はカリフォルニア州にとつて非常に危険とみなされた人々を受け入れることを望まないと抗議した。約四千人はコロラド州とユタ州まで行つた。

移住することを望んでいない人々のこうしたばらばらな移住は混乱を拡大する結果となり、五月二九日までで自由意志による移住は禁じられ、軍は移動について調整する計画を策定した。

陸軍中將ジョン・L・ウィットは三月二日命令を発し、全ての日系人は、居留が市民、老若男女を問わずカリフォルニア州の大部分、西部オレゴン州、ワシントン州、南部アリゾナ州から移動させられることとなつた。それは、結果的にアメリカ史上最大の強制移住となつた。

転住センターの地は遠く、十分な面積もないか、荒れ果ててはいるものの灌漑することはできる砂漠の大地であった。そこでは人が到着するたびに、新たにタールで葺かれた急ごしらえのバラックが建てられ、有刺鉄線のフェンスが作られていった。四二年一月までに、はじめにも全ての「エバキュー」はわずかな所持品を梱包し、牛馬のような扱いで列車に詰め込まれ、七千人から一万八千人の収容者でこたがえしているバラックへと送りこまれ、WRAの兵士に監視された。

日系二世のハリー H・L・キタノ博士は、『アメリカのなかの日本人』（内崎以佐味訳 昭和四九年 東洋経済新聞 Japanese Americans - Evolution of a Subculture 1969 by Prentice-Hall, Inc., Englewood Cliffs, New Jersey）の著者であり、アメリカ日系人の研究者である。当時、まだ高校生だった博士は、ミネ・オオクボと同じトパーズの収容所に送られた体験について、こう書いている。

トパーズでの拘留第二日目に、若者によくある限界を知りたいという試みから、高校生の友人と有刺鉄線の境界を越えてみた。鉄条網の破れたところから五〇ヤード歩いて出たところで、われわれは銃の引き金に手をかけた憲兵に取り囲まれ、尋問され、名前を記録され、警告を受けた上、ジープに乗せられて収容所に連れ戻された。それは恐ろしいぞっとする程の経験であった。これ以外にも、柵を越えた拘留者を憲兵が実際に射殺した例もあった。一部では衝突が起こった。サンタ・アニタの集合センターでのこと、拘留者の中に警官の一団がいて、拘留者の持ち物を私用に供するために没収しているという噂に反応して騒ぎが起こった。

拘留されているものとアメリカ政府を代表する役人が対決している間、「殺せ！」とか「犬！」といった叫び声上がり、二千人もの日系人群集の中の若者は荒れ狂い走り回った。この事件は二百人の憲兵の導入と軍法の適用、治安強化によって収拾された。

このキタノ少年が体験し、目撃したような事実はあったと推測される。第二章で紹介したミネ・オオクボに戻るが、彼女はイラストを提供しただけでなく、収容所内での日系人の暮らしについて、『フォーチュン』誌に情報を提供していた。

ミネ・オオクボも、キタノ少年が目撃したこの射殺事件を見ていたに違いないが、これを『フォーチュン』にリークできない、あるいは、自らのイラストにできない事情があったのではないかと推測される。

収容所における言論統制は厳しいものがあつた。水野剛也氏の「日系アメリカ人仮収容所における新聞検閲」によれば、

収容所内では、「エバキュー」を対象とした新聞や雑誌が発行されていた。しかし、彼らの言論は厳しく制約されていた。収容所規則は「日本語による如何なる種類のニュース出版物も発行されない」としている。さらに、「エバキュー」の外部の出版物への投稿や寄稿も阻止しようとした。「所外の友人へ手紙を書く場合、特にその内容が外部報道機関に再録される可能性がある時には注意が必要である。筆者にそういう意図がないのに、キャンプの内部事情を記した幾つかの手紙が誤解を招くように流布されている」と警告を発している。これを防ぐために、当局は収容者が出す手紙を開封したり差し止めたりした。

このような検閲制度がある限り、ミネ・オオクボが日系人脱走者が警備兵に射殺されたのを見たとしても、それをセンター内の雑誌や収容所の外に報告することは不可能であっただろう。

ミネは、監視兵に絵の内容をチェックされるのを防ぐために、自ら「伝染病につき隔離中」という札をぶら下げて仕事をしていた。

（四四年四月号）

WRA（戦時移住局）は「危険なジャップ」を野放しにしていると非難され続けてきた。ハースト系新聞は毎日、「甘やかし」という言葉で、全ての日本人は戦争捕虜として扱われるべきだという主張を繰り返した。しかし、誰も転住センターを訪れたり、居住環境や食事の場を見ないままに、WRAのキャンプ経営に対して「甘やかし」というだけであった。

収容された「エバキュエ」はバラックに詰め込まれ、六〜七家族に一五坪ほどの空間が割り当てられた。間仕切りはなく、混み合ったベッドの間に吊られた薄っぺらな木綿のカーテンでかろうじてプライバシーが保たれていた。板切れでもあれば棚を吊ることもできたが、キャンプではそれも貴重品だった。バラックは清潔だが炊事の設備や水場はない。電気プレートを持っているか、ジ・アウトサイド「出所を許可された者」がそれを差し入れてくれない限り、調理設備は何もない。軍のキャンプでは、普通、一ニから一四のバラック（二五〇人〜三〇〇人が生活している）ごとに中央食堂、洗濯用の小屋、公衆軍用トイレとシャワーの設備があった。

収容されている「エバキュエ」にはアメリカ人より贅沢な食事があてがわれているという噂が繰り返されたが、一日の食費は一

人四五セント以下で、一食あたり一五セントでは十分に栄養ある食事とは言えない。小さい子どもや育児中であつたり、妊娠中の母親、食事療用中の人にはミルクが配られる。第三の食料調達の道はキャンプの中で耕される畑からの収穫である。そのお陰で一人当り三一セントという食費で済んでいるのである。

仕事を求めれば働くことはできるが、ほとんどが肉体労働である。彼等はキャンプを耕して野菜を育てたり、食堂で食事の準備をしたり、コケイジョン（キャンプ内の白人スタッフ）を手助けするためにタイプを打ち、協同組合の店で働いている。

WRAだけで通用する独特の言葉がある。「コケイジョン」Caucasian」は、収容所内の特定の行政マンを指し、「コロニスト、植民地支配者」colonis」とも呼ばれた。抑留された日系人は「エバキュエ、抑留者」evacuees」である。収容所から出て行くことを許されたものは「ジ・アウトサイド、出所を許可された者」se outside」である。

仕事は、床屋、靴直し、病院の医師、便所の雑役、台所のゴミ集めなどさまざまである。最高の賃金は月一九ドル（例えば医師）であり、その賃金は月で最低は一二ドル、平均一六ドルであり、それに自分と扶養家族のための手当、最高大人で三・七五ドルがある。

個人的な娯楽は禁止された。経済活動はすべて協同組合で管理され、理髪などは標準的な額が決められている。ほとんどの収容者はわずかな月収や戦前の貯蓄を取り崩したりして、配給手帳では買うことのできないちょっとした食料を買う。衣類、靴、園芸機具などは生協で調達する。子どもたちはバラックから学校に通い、病気の時はセンターの病院で診てもらふことができた。

センター内に成上がりとそれに服従する者という支配関係がで
きる。治療に優れた日系人医師は戦前は快適な家で優雅に暮ら
していたが、ここでは家族全員でワンルームに詰め込まれている。
センターの病院での日系人医師の月給は一九ドルで、結構な高級
取りの「コケイジョン」の医師（技量は日系人医師より未熟であ
る）の指示に従っている。二〇年に涉り、園芸栽培や園芸店を經
営していたものも、カリフォルニアで手広く農場を經營していた
ものも、ここでは、センター農園の「単純労働者」に過ぎない。
記録によれば、迫害されている間も、日系人は公的援助の世話
になることを嫌っていたという。彼らは誇り高く、お互いに励ま
し合い助け合ったりはしたが、WRAの世話になつたり、生活保
護のリストに乗ろうとはしなかった。

センター内の自治

日系人たちは常に孤立を強いられ、排斥されたあげく、自分た
ちだけの社会を作らざるを得なくなった。この傾向は以前よりも
ひどくなつて来た。カリフォルニア州マンザナルにあるセン
ターは、二つの巨大な山脈の間に広がる荒涼とした砂漠の谷の片
隅にある。彼らは精神的にもこのセンターと同じように孤立させ
られ、仲間内での結束を固めていくしかないのである。彼等はア
メリカの市民生活や戦争や世界の動きからも孤立している。子ど
もたちは、アメリカの学校で他の子どもと競いあつても、家へ帰
れば日本語を話す。十代の少年、少女のドレスやスラング、行動
などをみると、彼らはまさにアメリカ人のように振る舞っている。
裏を返せば、それは彼らがアメリカ人であるということを目に自
らに納得させることが難しいからでもある。彼らはやがてゲートを出

て行く、あるいは出て行かなければならないことを知っている。
「エバキユエ」たちは、印刷された文書よりも噂の方を信用し
ている。噂といつてもそれは軍が意図的に流したものかもしれな
いのだが。収容者全員が他所のセンターに移されるかもしれない
などという噂もある。これは過去二年間に移動した経験を持つ
人々にとっては恐ろしい悪夢としかいいようがない。

キャンプ暮らしでは些細なことが悩みの種となる。二五〇人程
の「エバキユエ」のグループごとに一人の地区監督者がいて日常
のトラブルにあたる。食事が準備されていないとか女子のトイレ
に紙がない、隣人が夜遅くまでラジオの音を大きくして聞いてい
るとか、二九舎の屋根が雨漏りするだとか、指導者はそうした不
平に耳を貸し、トラブルを解決することで、月に一六ドルの収入
を得ている。

WRAのバラックには小さいながらも確かな自治組織がある。
ほとんどのセンターにはブロックの代表や指導者からなる議会有
あるが、決定すべき議事は限られ、議員はWRAの新しい規則や
計画を聞き、構成員に情報を伝達することが主な仕事である。

「エバキユエ」の三分の二はアメリカ市民権を持っていたが、
アメリカ生まれの「二世」の多くは一八歳から二八歳まで、地
区マネジャーの仕事につくには若すぎた。日系アメリカ人の中
には、教育を母国で受けるために日本へ帰った「帰米」と呼ばれる
人々も数多くいた。「帰米」の全てではないが、そのほとんどは
「プロ・ジャパン」日本支持派であり、最終学歴を日本で終了
したものは特にそうであった。環境に適應できない「帰米」は、
二世にも嫌われ、センター内での不平不満の種を作っていた。

結局、アメリカの市民権を持たない「一世」が地区の支配人と

して、必要な権威を持ち、安定感があつて、世馴れた賢さなどを発揮するという結果となる。一世は家族の伝統を守り、日系人社会のリーダーとして尊敬を集めていた。彼らは合衆国の法律で市民になることを禁じられていたので、最初から居留外人なのである。だが、一世の多くは合衆国に対して本気で忠誠心を持っていた。合衆国がその忠誠心を呼び覚ましたのではなく、一世がその子どもたち(二世)のアメリカ人としての安全な将来に思いを巡らすからである。

センターの政治や行政はデマゴグによって左右される。労働中にトラックが転覆して人が事故死したことがある。それに対し大きな葬儀を出すことに行政が許可を渋ったり、三、四人の「コケイジョン」(白人のスタッフ)が人種差別をあらわにするようなことがあると、すぐ、「扇動家」が噛みついた。それがキャンプの大きな係争となるかどうかは、センターの信頼の度合いに掛かってきた。キャンプ内の係争や苦情などは、「エバキュー」の代表が処理した。WRAも人手不足なのである。

軍が鎮圧に出る騒ぎとなった二つの「暴動」は、小さな苦情が重なって起きた。暴動は権力に刃向かい、行政を叩つぶそうとするグループによって、危機的状況へと発展し、ストライキが決定された。だが、収容所内におけるストライキとは、彼ら自身の首を絞めることでもあった。センターの全ての社会的労働は、「エバキュー」自身に対するサービスの供給だからである。暴動が起きて、監督者が治安の維持に助けが必要と思つた時のみ、軍隊が導入された。

稀に、センター内のトラブルがストライキや暴動につながることもがあつても、それは、平時と比べてもそれ程多くはない。治安

の維持は、「エバキュー」によって保たれ、自警団組織が取り締まっている。

治安の維持は、以前より保たれていた。イデオロギー的な空気は一扫されて、「プロ・ジャパン」日本支持派や「非忠誠組」はすでにカリフォルニア北東にある隔離センターに送られて、あと九つのセンターには「忠誠組」だけが残っていたからである。

忠誠登録≡Registrationと非忠誠分子の隔離≡Segregation

すべての「エバキュー」にとって、「登録≡Registration」と「隔離≡Segregation」という言葉は、「拘留≡Evacuation」と同様、嫌な響きを持っていた。センターの全ての成人に課せられた「忠誠」か「非忠誠」を決める質問の答えと、FBIの記録を参照したり、特別なヒアリングを加えて、WRAは「エバキュー」の東へ行き仕事につく権利について「許諾」や「拒否」を判定した。

その質問は、隔離センター行き、つまり「非忠誠者」を隔離するための判断材料にも使われた。非忠誠者とその家族を含めた約一万八千人は、日本側が本国送還の日付を明示しない限り、戦争が終わるまで高い鉄条網で囲われたツールレイク収容所に留置されることになるだろう(これら一万八千人は司法省に拘禁されている数千の人々とは混同されるべきではない)。

忠誠者と非忠誠者を分けることは、そう簡単なことではない。もともと、「忠誠心」はメジャーをあてがって測ることは難しい。「エバキュー」のふるい分けは難航した。選抜は一九四三年二月、軍が日系アメリカ人の部隊を戦場に送ることを決定した時から始まった。「登録」のための調査には、アメリカに忠誠を誓い、喜

んで戦場に赴くかなど二八項目の質問が印刷されていた。徴兵の義務のある年代のもの全てにそれは適用された。センター内の全ての成人にそうした記録を持たせた方が良くと誰かが考えたのであろう。突然、この計画は変更され、一七歳以上の全ての人々に二八項目の質問が課せられることになった。

転住センターは、流言と不信に満ちた社会である。ここでは今日の趣旨説明が明日はまったく異なるような悲惨なことが起きる。新たにセンターに到着した人々は、「拘置」についてはスタンバイをさせられ、資産や自由を失い、「敵」というレッテルを貼られたことを痛い程意識していた。ほとんどのセンターで、「登録」の目的について誤解があった。質問事項はかなり不用意な語句が並べられていたので、「登録」の過程で質問を変更せざるを得なくなった。数千人は用紙を埋めることを拒否したが、その他の者は彼らの失った仕事、家庭そして市民としての権利を思い出して、憤りの答え（それは結局「不忠誠」ということになるのだが）を書いた。彼らには何の罪もない。彼らは、いい加減に彼らを拘禁してしまつた「民主アメリカ」を防衛することに熱意は持てなかつただけである。

WRAは、公正であろうとして、彼等が憤りや気持ちの混乱から答えてしまったことをやり直す希望があるものは、数カ月の間、事情聴取を認めた。プライドから最初に書いた調書で頑張り通すものも幾らかはいた。ツールレークに送られた人々が皆日本への忠誠を誓っていたかについては疑問が残る。

ツールレークを選んだ一世の多くは日本に対する忠誠心や、日本にいる家族との固い絆があった。彼らはアメリカに忠誠を誓うと日本にいる親族が報復されることを恐れたのである。ツール

レークを選んだ両親は、殆どが、子ども連れだった。子どもたちのうち、一七歳以上の少数の者が、家族の絆を断ち、プレッシャーに反抗することができた。ツールレークの高校では、「公民」と「アメリカの歴史」という教科が人気の選択科目であったことは、皮肉ながらも意義深いことである。

一方、日本政府は、二世や帰米を保護しようという法的主張はしていない。スペインの領事が日本に状況を報告するため、ツールを訪れた際、彼は日本国籍を持つ一世の福祉についてだけ関心を示した。合衆国の法律は、二世と帰米がどう望もうとも、戦時の際は彼らがアメリカの市民権を放棄することを禁じている。戦時においては、二世と帰米のアメリカ国籍離脱と一世の本国退去は、如何に彼らが望もうと好ましいことではない。軍属でない戦争犯罪人の交換についての交渉は遅々として進んでいないが、遅延の責任は日本側にあり、アメリカにはない。

日本側の捕虜交換交渉についての消極的な姿勢は、ツールレークで暮らす日系人を気落ちさせることはない。彼らは日本へ帰ることよりも、むしろアメリカに止まることを望んでいる。彼等は「非忠誠」や家族関係という以外に、複雑な理由でツールレークに止まっている。たとえば、「安全」とか「癒し」という理由でここを選択した者がいることは明かである。それは、様々なセンターで、彼らが自ら隔離されることを望んだというパーセンテージが証明している。昨春秋、ツールレークのキャンプを隔離センターにすることが決まった時、ツールの抑留者一万三千人のうち、六千人近い人々が残留を望んだ。この高いパーセンテージは（他のセンターと比較しても最高だったが）、彼らが再び追い立てられ、転住させられることを望んでいないことを物語っている。た

たとえば、アイダホ州のミニドカ転住センターは、七千人中わずかに二五人がツールに行くことを選んだだけである。

その他のWRAセンターからツールレークを選んで行ったのは、ごく僅かの疲れてうちひしがれた人々でしかなかった。その理由は、彼らはツールのキャンプの鉄条網の張られた塀は、戦時中は取り払われることがないことを知っていたからである。彼らは一定期間ある避難所を持つ必要があった。「エバキュエ」たちは、他所のセンターは突然に閉鎖され、全員が何の資産もないまま追い出されるかも知れないと噂していた。

あるものは民主主義の約束を反故にされたことを抗議するためにツールレークを選択した。たとえば、一九四一年の春、ファシズムの脅威を強く感じ、兵役を志願したカリフォルニア州出身の若い二世がいる。彼は日本がアメリカを攻撃した後、彼の母国であるアメリカの軍隊から突然排除され、他の「エバキュエ」と同じように塀の中に留置された。一九四三年二月、彼はアメリカに対する忠誠と母国防衛に対する意志を問う質問表を手渡された。だが、彼はそのような方法で自らの「忠誠」を証明することに耐えられなかった。何故って、彼はすでにそれを十分に証明していたのだから。彼がツールレークにいるのは日本に対する愛ではなく、一九四一年の時点で忠誠を誓った政府に対する抗議の姿勢からであった。

ある日系人は第一次世界大戦で、アメリカ軍の兵士として戦った退役軍人会のメンバーであった。真珠湾が攻撃された直後、彼はカリフォルニア州で軍への奉職や勤労奉仕を志願した。が、拒絶され転住センターへ送られた。彼は収容所内で「もしあなたが自らをアメリカ人と思うなら、この門を出よう！」というスロー

ガン掲げ、「トラブルメーカー」となった。結局、彼は戦時隔離センター送りとなり、最後にツールレークに廻された。昨年、米財務省は彼からの小切手を受け取っている。有刺鉄線を巡らした塀の中から郵送された小切手は百ドルを越えていた。それは一九四二年の彼の収入に対する税金に相当する額であった。一九四一年、彼はポルトガル船のナビゲーターとして働き、その報酬を一年遅れて受け取った。彼は何時も同じように税金を払うことにこだわった。彼はもちろん、日本に行こうという希望を持ってはいない、唯、ツールレークで、民主主義の犯した過ちに抗議しながら、戦いに加わらないのみである。

倦怠とか抗議という理由でツールにいるものは少数であり、数の上ではさほど問題ではない。しかし、彼らは、混乱し、勇気を失い、当然な怒りに身を置く人々に何が起るかということを示している。彼らはわれわれの社会を反映するひとつの醜い傷跡でもある。一万八千人の収容者にこれから何が起きるかを想像するのはまだ時期早尚である。数千人にも及ぶ人々が捕虜交換船「グリップホルム号」で海を渡ることを許可されるかもしれない。最終的に、彼ら全員が敗戦後の日本に向かって乗船するのだろうか？あるいはアメリカの戦後の問題として残ることになるのだろうか？

転住

ツールレークの収容者たちが何処に行くかより、他の九つのセンターで忠誠を誓った「エバキュエ」たちがどうなるかの方が重要である。「登録」やヒアリングでふるい分けられて、忠誠を誓った人々には「出所許可」が認められた。多数の公式文書や、写真

や指紋付きで、ナンバーを打たれた身元保証カードで身を固めて、初めて、「エバキュエ」は東部へ向かうことができる。旅行費用として一日三ドル、蓄えがなければ、二五ドルの現金も渡される。

過去一年間、一万七千人の「エバキュエ」たちが「出所」していった。彼らは、多少の例外はあるにしても、ほとんどが若くて独身か、結婚していても子どもがいなかった。ある二世は二年前、彼を拒絶した社会へ勇気を奮い起こして入り込んでいった。塙を背に「出所」すると、彼らは丸裸で放り出されるような恐怖を覚えた。群れていることは嫌なことであったが、それは結束力でも、防衛力ともなったので、それを超えることは難しかった。いったん、兵士に守られていたセンターのゲートを出ると、人類が最初そうであったように、若い二世はまったくの独りぼっちとなり、一世である父が移民契約労働者として経験したよりもさらに強い偏見に直面することになった。

二世を外へ引き出す強い磁力は、東部へと出所して行った連中からの手紙である。すでに出て行ったものは、友人に対して熱心に報告を送り返す。新しい生活を始めた者は、年齢は一八〜三〇歳がほとんどで、皆、パイオニアである。彼らは、工場、レストラン、ホテル、オフィス、キッチンなどで働き、自らのみならず、後に続く者たちにもその未来を築きつつあった。「ニューヨークでは、日系人はどんなレストランでも食事が取れる」、「東部へ向かう車中でもあまり関心を持たれなかった」とか「シカゴでは、日本人だということを誰も意に介さなかった」という手紙が来れば、残留しているもの間に小さな希望が広がる。シカゴのような都会に転じ住めば、ある種の組織化された社会的保護を受けることができる。誰が恩恵から孤立しているのかを教会の仲間が教

えて、その支援を得ることもできる。

過剰な偏見がなくて、何らかの仕事の機会を提供してくれる社会であれば、日系人はどこへでも「出所」が許可されて送られた。

七名の WRA の地域オフィサーは、仕事を探すスタッフを抱えて、農場主や工場経営者へ相談を持ちかけ、世論を気にしながらも概して上手くやっている。

イリノイは転住した日系アメリカ人を四千人と最も多く受入れた州となった。

彼らの多くは、シカゴかその近郊で仕事を見つけたことが出来た。ウイニテイカ（先住民）の主婦達と日系人とが召使いの職をめぐって張り合ったが、それについては『シカゴトリビューン』紙でさえ穏健な態度をとっていた。ただ、ハースト系新聞だけは相変わらずこのことをガナリ立てた。

オハイオ州の産業都市は、転住センターから約千五百名を受け入れた。東部防衛地域では、特別の転入許可が必要であったにも関わらず、すでに、数百人の日系人がニューヨーク市へ転入してしまっている。北東部への流入は確実に増加傾向にある。ウイスコンシン州、モンタナ州、アイオワ州など中西部に散らばったものは数百を超える。

もちろん、こうした受け入れの流れに抵抗する地域もある。ヨーロッパ戦線で勝利し、太平洋戦線からの死傷者リストのみが送られて来る現在、「エバキュエ」に対する敵意は、増加しつつあっても減ることはない。

ユタ州は約二千名の「エバキュエ」を受け入れた。そのほとんどはソルトレイク市とオグデン市で、最初は穩便に受け入れられた。

しかし、先月、アメリカ労働組合は、ソルトレイク市当局に対し、日本人を祖先にもつ人々に対する就業許可を取消すように申請した。やむなく二千名はコロラド州に向かった。

しかし、コロラド州デンバーにおけるハースト系新聞の『ポスト』紙に掲載されたキャンペーンや新しい差別的な法律の提案は、アメリカ国内に論議を巻き起こしている。

コロラド州議員のウェン・W・ヒル(Wayne W. Hill)は、先月、軍曹の制服に身を包んだまま、キャンプ地から緊急の休暇を取得し、州議会へ向かった。日系居留者を除いた土地所有法案「日系人差別目的の法案」を通さないように要請する為だった。

軍から除隊する時、「アメリカの自由を守るためなら、戦場で死ぬのと同様、喜んで政治生命を失おう」と彼は述べた。

彼は暖かい拍手で迎えられ、下院は日系居留者の土地所有を認めない法案を通したが、上院は一五対一二でその法案を却下した。

アリゾナは、去年、同じような人種偏見の馬鹿騒ぎを行っていたので、WRAは日系人をアリゾナへは送り込もうとはしない。

一年前、アリゾナ州知事はある法案にサインした。その法案とは、日系人にものを売る場合は、売ることを数日前に新聞に公告し、知事に申請の手続きを取ることをしない限り、タバコ一箱すら売ってはならないというものであった。その法律は数ヶ月間施行されたが、結局合衆国憲法違反として撤回された。その法律は実は新たに移住してきた五七名のWRAの日系人を対象としていたのではなかった。アリゾナに戦前からいる六三二名の日系人を絞め殺す意図を持っていた。彼らの多くは、アリゾナで野菜農業ビジネスの厳しい競争を勝ち抜いて、豊かな暮らしを実現していたのである。

一万七千人と数は少ないが、若く係累のない壮健な二世には、本人とはかわりなく、彼らをどう扱うかという最大かつ困難な問題が残された。扶養家族のない若者を軍が調達するのも数に限りがある。今年の始め、軍はボランティア兵としてのみ受け入れていた方針を変更して、黒人と同様、二世のみの人種別部隊を編成し徴兵することとした。(すでに、千二百人を下らない二世がボランティア兵として、センターの塙を後にしている。ハワイ在住の二世を加えると、一月には、一万人程が志願している。ある日系アメリカ人の大隊は、大きな犠牲を伴いながらも、イタリア戦線において軍功を立てている)この新しい方針転換では、数千の「エバキューエ」が軍から除隊することになるだろう。だが、問題は明らかに中高年と大家族の扱いである。よく知られているように、「エバキューエ」の家族の絆は固い。そこで、WRAは、転住した若者たちの多くが、じきに両親や年下の兄弟姉妹を自分の元に呼び寄せることになるだろうとみている。たぶん、これら二世は、自ら過激なまでにアメリカ人たらしめているので、その家族をフェンスの中には置いておきたくはないだろう。

しかし、WRAのセンター内には、残していくことのできない年端の行かない子どもを抱えた何百もの家族がいる。センターにいる限り、衣食住が与えられ、医療も教育も受けられ、さらに月一六ドルが支給されるから、そこを出て新たな生活をスタートするには勇気が必要だ。農家の人々は、中西部に行つて、新しい土地で未経験の農業をはじめめることを危惧している。そして、多くの人々が、日雇いの労働者としてもう一度スタートし直すには、歳を取り過ぎたとも感じている。中には、小売、輸出入、卸しな

どの流通業に従事していた人々もいる。カリフォルニアのリトルトーキョウへの人口の集中が、日本人が相互に物流やサービスをを行う商業基盤の構築を可能としていた。たぶん、これからはそうしたリトルトーキョウは存在し得ないだろう。

もし、「エバキユエ」たちが明日、西海岸に戻ることを許されたとしても、彼らは昔のスタイルのままの生活を再構築することを躊躇するだろう。人種的偏見を別にしても、この二年間で、彼らの築いた基盤は、すっかり失われてしまっていた。少数の土地所有者を除けば、日系人は、いま、東部でしているように、辛抱強く努力を重ねて、カリフォルニアで生活の場を築くことを望んでいる。彼らは完全にカリフォルニアから切り離されてしまった。現実には、カリフォルニアをノスタルジックに思い浮かべるような段階をとうに超えている。

施しを受けたたり、政府からの救済を受けたりした嫌な思いが、すこしは愉快なこともあり、身の安全にはやむを得なかった。そう思えるまでに気持ちが悪く薄らいでいくのにどれくらいの時間が必要なのかはわからない。かろうじてプライドを保ち続ける人に、多くを期待するのは酷であろう。二世である息子達が土地を所有したり、貸りていた土地がかなりの大きさになっても、変わらずに「背を丸くして田畑を耕やす」猫背の労働」を続けてきた年老いた農婦は、収容所に入って初めて休息をとることになった。ずっと日雇いの労働者であった年老いた独身者たちは、センターでの保証された暮しをすなおに楽しんでいる。

戦争がもう二年長引いて、WRAがその間に二万五千人以上の日系人のための出所先探しを継続すると仮定しても（WRAはその数字以上の事をしているのだが）、公式発表に従えば、四万五

千人ほどの日系人が転住センターに残ることになる。しかも、この発表はツールレックと法務省の敵国人捕虜収容所に収容されている二万人については言及していない。

最終的に残留する日系人の数が二万五千か四万五千であろうと、一九四二年から一九四三年にかけて実施されたこの「保護的な拘束」は、一種のインディアン特別保留地のような存在として、これから長年に渉りアメリカ人の良心を悩まし続けることになるだろう。

軍事上の必要性による警戒厳令と日系人の保護的監禁

まもなく、日系人の拘留と拘禁、財産補償について、憲法違反を問う一連の訴訟が高等裁判所で始まるうとしている。裁判は数年に渡って続くことになるだろう。

「憲法違反」についての陪審員の評決は、財産返還要求についての最終的な調停を含め、記録をせずに終らせることはできない。それは、軍の命令ということだけでなく、アメリカ軍法廷、ハースト系新聞のニュースのヘッドライン、連邦最高裁判所のアーカイブなどに記録されることになる。なによりも、それは何万という大多数がアメリカ市民である人々の人生に記録として刻まれるのだ。

将来、後世の歴史家がこの記録を見たら、軍のカリフォルニアにおける方針とハワイにおけるそれとの整合性を見い出すことは難しいかもしれない。

日本人の血を引く人々はハワイ諸島の人口の三分の一以上を構成していた。そして、真珠湾攻撃が起こり、ヒッカム空軍基地が殺戮の場となったにもかかわらず、ハワイでは大掛かりな日系人

拘留はなされなかったのである。

戒厳令が敷かれ、誰もが持っている重要な憲法上の権利が一時宙に浮くことになったのを良いことに、司法省や軍当局は数千もの疑惑を丸め込み、事を処したのである。

ハワイはカリフォルニアと異なり、日系人拘留を要求する強い政治的、経済的圧力はなかった。もし、ハワイで日系人が移住させられたとしたら、サトウキビ畑やパイナップルの栽培といったハワイの生活基盤は揺らいだであろう。ハワイ州司令官デロス・C・エモンズ (Delos C. Emmons) 将軍は「日系人はこの地域には欠かせない存在だ」と述べている。

一九四二年三月に発令された西海岸における「軍事上の必要性」という法令は、まる二年間効力があつた。この不当な(準)戒厳令によって、少数のマイノリティーの憲法上守られてしかるべき個人の自由や権利が脅かされた。東部に移り軍需産業で職を得たアメリカに忠誠を誓った「エバキユエ」たちは、何故、キャベツ栽培をするためにカリフォルニアに戻ってはいけないのか問う権利がある。一九四二年三月の発令は、その根拠に欠けているようだ。たぶん、軍は「エバキユエ」の故郷帰還を、軍事的理由というよりカリフォルニアの強い圧力と脅迫の理由に禁止することにしたのである。ハースト系新聞は、西海岸への日系人の帰還が許されたとしたら、大虐殺が起こるだろうと予告している。サクラメント市のホーム・フロント・コマンド(在郷戦線)のような新しいグループはこう叫び始めた。「彼らは戻ってきてはいけない。永久に！さもなくば、ただでは済まされない」。農業協同組合、カリフォルニア農場組合、アメリカ在郷軍人会、輝ける西部の未

裔会などが、この「さもなくば…」という圧力を繰り返した。政治家もそれに同調して、嫌われているマイノリティーは一定期間カリフォルニアから離れているべきだと公言してはばからない。

市民として自由や人権に関心を持ち、(準)戒厳令が続くことを由々しい問題だとするカリフォルニアの人々もいたが、そんな声はすぐに打ち消されてしまった。カリフォルニアCIOや女性有権者連盟、教会の一派は「保護された安全」が続くことに対する闘争を表明しつつある。彼らはカリフォルニアの著名な学者や知識人によって構成される「アメリカにおけるフェアプレイの原則委員会」と連携して動いている。

一九四二年に日系人の拘留を命じたジョン・デウィット中将は「カリフォルニアにジャップを呼び戻さない限り、ジャップがどう扱かわれようと知ったことではない。ジャップはジャップだ」と発言し、人種差別を推進するカリフォルニアの人々を勇気づけた。

昨秋、デウィットの跡を襲ったエモンズ将軍は一言も発言しなかった。彼はハワイにおいて日系人の拘留の命令を出さないことを決定したあのエモンズである。

カリフォルニアや太平洋沿岸の諸州への軍の日系人締出し許可が長引く程、ハースト系新聞やその同調者による「日系人の帰郷が許されたら、カリフォルニアは無法状態になる」というキャンペインがより人々に浸透することになる。アメリカ市民である日系人の「保護拘留」を続ける限り、合衆国は引き続き曖昧な政策を抱え続けなければならない。過去、アメリカの慣例法では暴力を振るう市民を拘束したことはあるが、暴力や脅迫による犠牲者

を拘束することはしなかった。「保護拘留」の目的は他の選択より武器を使うことが都合が良いということ全てに対して証明することであった。カリフォルニアは、人種差別と非公認の自警についての長い歴史を持つ州である。デトロイトの黒人、ボストンのユダヤ人、テキサスのメキシコ人をどうするのか？マイノリティの「保護拘留」には終わりが無い。そうしたことはナチスがすでに証明しているではないか。

『フォーチュン』には、日系人を収容した戦時敵国人強制収容所の実態を正確にレポートしようとする姿勢が伺える。この記事は明らかに日系人に同情を寄せている。戦時であることを思えば、この記事は十分評価されてしかるべきであろう。『フォーチュン』は、三分の二はアメリカ市民権を持つ彼らを有無を言わず収容所に押し込めた連邦政府や軍の政策を、憲法違反、人権侵害の疑いがあるとして、アメリカの歴史の一大汚点と捉えている。そして、日系人糾弾の急先鋒であるハースト系新聞とその支持団体のキャンペーンを、世論をミスリードするものとして非難している。

ミネ・オオクボのイラスト

戦後、出版されたミネ・オオクボの体験を綴った『市民13660』（彼女の認識番号）には、『フォーチュン』で使用したのと同じイラストが使われている。そのキャプションを比較してみると収容所を報道するアメリカ・ジャーナリズムと収容されていた日系人の対比が明らかである。（ミネ・オオクボはこのイラストの中で、自分を一目でわかる姿に描いている。露柄の衣装を着けているのが彼女。）



タンフォラン競馬場はサンフランシスコの郊外にあり、軍の集合センターの一つであった。



市民と居留外人かを問わず、西海岸の全ての日系人は隔離収容所へ運ばれた。

横組が『フォーチュン』のキャプション
縦組が『市民13660』のキャプションである。

一、自宅からタンフォラン競馬場（集合センター）に収容されるまで

トラックは荷物を満載していたが、その上に私たちの荷物を積み上げた。よじ登って、それを押さえながら行った。一六棟で降りて、荷を受け取りわが馬屋へとそれを引きずりこんだ。

「アクミ・ビールで爽やかに」という巨大な宣伝広告が、付近の丘に据えられていた。それはキャンプのどこからもはつきり読めて、禁酒を強いられている拘留者を嘲笑しているようにみえた。暑い日など、特にそれは目につくのだった。



食事を貰うため、エバキューエは大食堂の前で長い行列を作って待った。



馬屋は人を収容するために綺麗にされていたが、飼葉の臭いは数ヶ月間消えなかった。

二、タンフオラン競馬場での生活

行ってみると、長蛇の列が四本、大食堂の戸口から外に続いていて、風が激しく、冷たかった。一時間並んでようやく戸口まで辿り着いたが、驚いたことにこの列は中までは続いておらず、目的のところへはつながついていなかった。もう一度やり直すには、その行列は余りにも長かった。

ここに座っていても仕方がない。思い直して、また、私たちは馬屋の掃除を続けた。手箒で交替で床掃除をした。この箒が持つて来たものの中で唯一の実用品だった。



プライバシーは混雑したベッドの間に吊されたカーテンで保たれ、ここには暇な時間が流れるばかりであった。



男性、女性、子どもに対する組織化はこれらのリトルトーキョウを前よりよけいに帰属意識の高い場所にした。

四百人程の独身男性は特別観覧席の大部屋に寝泊まりしていた。彼らは四六時中一緒に生活で、なかにはシーツや毛布で間仕切りを築くものもいた。年をとった独身男には、生活とは次の食事を待ちわびることとなった。しかし、中には暇を作って才能を伸ばす工夫に余念のないものもいた。

そうこうするうちに、食堂の列は短くなり、もう一度夕食をアタックすることにした。今度はどうにかじやがいもとパン二切れの他にも、缶詰めの肉料理を少し手に入れることが出来た。



列車に詰め込まれ、内陸の別の護衛付のキャンプに送られた。

ネバダの砂漠地帯を越えて列車はトバズへと向かう。二日目の夜になると、極度の疲労から落ち着かず、眠るものなどはなかった。暖房用のストーブが暑すぎて息が詰まった。



6ヵ月後、彼等はいもう一度別の収容所に運ばれ、軍のセンターから牛の群れのように追い出された。

九月になるとユタの収容所送りになるといふ噂が現実のものとなる。弟と私は手荷物を検閲されて、第五団の八班に入れられた。何千人もの人々が鉄条網の柵の近くに集まり、別れを惜しんだ。列車に向かう人々の列の片側には、残留組の人々が別れの声を挙げており、その反対側には武装した軍警が警備していた。

三、タンフオラン競馬場からトバズへの移動



キャンプの一室の混み合うなかで、この家族はクリスマスのお祝いの飾り付けを始めた。

最初のクリスマスはうら寂しいものであった。食堂にはクリスマスツリーが飾られ、特別料理も出たが、お祝気分は皆無であった。中には、例年通りのクリスマスをやろうとする家族もいではなかった。



砂嵐の吹き荒む砂漠のキャンプのバラックに入れられた。

バスに乗り換えて荒れ地を進む。砂煙りの中から、不意に眼前に中央ユタ転住プロジェクトが大きく、広々と姿を現した。まさに荒涼たる風景であった。タール紙で屋根を葺かれた低い黒々としたバラックが幾百となく列をなして立ち並んでいた。バスを降りると、楽隊の音楽と歓声が聞えた。聞こえはするが、砂埃で目を開けられないので何も見ることはできなかった。



公衆シャワーと兵舎の便所はあてがわれたが、風呂桶で入浴する日本の風習は続いていた。



ビクトリーガーデン（家庭菜園）での野菜づくりもされたがほんの僅かの食料の足になるだけであった。

女性はシャワーを使うのにお互いを気にしたり、恥ずかしがっていた。お年寄りにはシャワーよりも昔ながらの風呂桶を好んだ。

アルカリ性の土壌は農業に不適だとの調査結果にも関わらず、春にはほとんど全てのものが家庭菜園を始めた。砂嵐から苗を守るために、みな貴重なボール箱、段ボール、使い残しの板切れなどを工夫して間に合わせの風よけを作った。



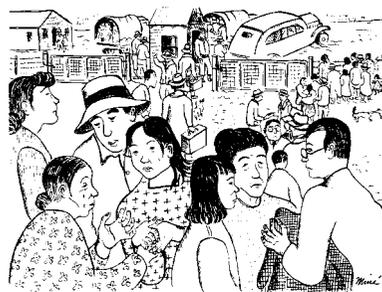
アメリカ同化学級では老人が読み書き算数とアメリカの歴史について学習する。



扇動家が現われ、社会から打ち捨てられ、不信の念でみられていた「エバキューエ」たちの間に、行政不信を広める。

一九四三年一月二十九日、ロズヴェルト大統領は、日系アメリカ人編成戦闘部隊に義勇兵を募ると公表した。募集要項が兵役年齢にある成人男子全員に配付された。その書類には二八の設問があり、アメリカ合衆国への忠誠を試すものであった。この二八の設問は収容所内の一七歳以上の全員に適用されることになった。その用紙は長く複雑なもので、設問の意味は汲取りづらく、回答は楽ではなかった。全収容所挙げての総会が何度も開かれ、反体制の扇動家たちは巧みにそれに乗じて誤解を大きくするよう焚き付けたのであった。

アメリカ同化学級も開講された。これは一世向けのもので、毎夜授業があった。



忠誠を誓った居留者で、人種的偏見に立ち向かう勇気のある「出所許可」は仕事を求めて東部へ向かうこともできる。

ようやく、拘留者を平常の生活へ戻す計画がこの収容所でも実行されることとなった。一九四四年一月、収容所生活に関するスケッチを終えて、私自身も出所の決意を固めた。出発の日が来た。証明書のサインを貰い、汽車の切符と二五ドル、旅行中の食事代として日当三ドルを至急された。これは無期限出所をする全員に支給されるものであった。全てを済ませ、国内治安事務所で通行許可証と配給手帳を受け取り、出口へと急いだ。見送りに来てくれた友人らと握手をかわした。それから、戦時転住局と陸軍との身体検査を受ける列に入った。とうとう私は自由になった。

第四章 天皇を操るものは誰か？ (Who Runs the Emperor?)

一九三六年九月号の『フォーチュン』における「天皇像」は、外人ジャーナリストの手になる最初の天皇像と思われる。そのイメージは、天皇は宗教的、政治的、軍事的指導力が一個の人間の中に融合した存在でありながらも、独裁的天皇制の枠組みにおける担がれた御輿(みこし)であり、時の政権のあやつり人形に過ぎない。それは在位中の(昭和)天皇に限らず、時代を超えてそうであったというものである。

一九三五年に七週間に涉って日本を取材した『フォーチュン』の二人の特派員はどのようにしてこのような結論に到達したのか？ 彼らのキャリアは？ また、その後(一九四四年四月号の『フォーチュン』)の編集者たちが、このシナリオに追隨したのは何故か？

この章では、一九三六年九月号『フォーチュン』、一九四四年四月号『フォーチュン』、さらには四四年二月の「縮刷版」の記事が、戦後の日本占領政策における天皇の退位問題と戦争責任追求にどのような影響を与えたかについて考察した。

また、半世紀程の間隔を置いて、二人のアメリカ人によって書かれた昭和天皇像についても言及した。ひとつはビックスの『昭和天皇』(二〇〇〇年出版)であり、もうひとつはベネダイクトの『菊と刀』(一九四六年出版)である。まず、ビックスの『昭和天皇』からみてみよう。

ビックスの『昭和天皇』

現在、英語圏の知識層に昭和天皇像のスタンダードとして認識されているのはビックスによる『昭和天皇』像ではなかるうか？

ハーバート・ビックス (Herbert P. Bix 歴史学者、ニューヨーク州立大学教授、一橋大学客員教授のキャリアもある) による『昭和天皇』という著作 (Hirohito and the Making of Modern Japan 訳書 二〇〇二年講談社) は、二〇〇〇年にアメリカで出版され、その翌年ピューリッツァー賞を受賞している。そのテーマは一貫して昭和天皇の戦争責任の追求である。

ビックスは一つの仮説を持っていた。それは「天皇と日本の支配層が、国体護持のために、天皇を戦争責任から擁護しようと奔走し、マッカーサーも占領統治にあたって天皇を利用しようとした。そのため日本の支配層とGHQは、天皇に関して共同作業を行った。」というものであり、「東京裁判もそのための茶番だった」と言う。

ビックスは、「昭和天皇は受け身の立憲君主でも、日本きつての平和主義者・反軍国主義者でもなかった。天皇は昭和に起きた重要な政治・軍事事件の多くに積極的に関わり、指導的役割を果たした。天皇が全権を握ったり、政策を立案することはなかったが、天皇や宮中は内閣の決定が正式に提出される前に、天皇の見解や意思が盛り込まれるように尽力したし、天皇の賛否こそが決定的だった。いや、賛否を口にしなくとも、何も言わないということが当局者を大きく左右した。日本政府もアメリカ政府も、それぞれの思惑から、戦時中の天皇の役割をあいまいにするため多大な努力をした。日本国憲法下に天皇を在位させたこと、戦犯裁判の可能性から救ったことなど歴史の事実が歪められ、日本の民主主義の発展も制約された」という。

謝罪詔書草稿 「朕^す不徳ナル、深く天下二愧^くツ」

ビックスの『昭和天皇』は二〇世紀最後の年に出版されたが、二

〇〇三年七月号の『文藝春秋』に、昭和天皇の国民への謝罪詔書草稿が掲載された。ピックスは『昭和天皇』を書いた時点で、この草稿の存在を知らない。草稿は戦後初代の宮内府(後に宮内庁となる)長官田島道治の手になる文書であるが、「朕ノ不徳ナル、深ク天下ニ愧ツ」とあるように、「朕」という天皇の一人称で書かれた詔書の草稿である。宮内府長官が独断で「朕」という一人称を用いるとは考え難いことから、この草稿は昭和天皇が承知していたものと思われる。五〇六文字からなる草稿は天皇の退位問題と戦争責任追求に揺れた昭和二三年に書かれ、その後、密かに封印された。この文書には、「憂心灼クガ如シ」とあるように、自らを責め苛み、国民に謝罪する昭和天皇の言葉が記されている。

この五〇六文字に込められた天皇の意志とは、即位以来二〇余年、国民に背くことのないよう勉めてきたが、善隣との友好を失い、列強と戦ったが、遂に敗戦に終わり今日の惨禍を招くに至った。戦いで命を落とした人々やその遺族、戦後の国家未曾有の災いを思う時、「憂心灼クガ如シ」であり、「朕ノ不徳ナル、深ク天下ニ愧ツ」と国民に詫びている。しかし、現在は希有の激変期にあり、自分一人を正しく潔くすることを急ぐあまり、国家百年の憂を忘れ、目先の安らかさを求めることは、真に責任を取ることにはならないと考え、国運の再建と国民の幸福に尽くすことで祖宗と国民に謝罪しようと思うというものである。この草稿をみる限り、天皇は戦争責任を自ら認め、国民に謝罪しながらも、在位し、国運の再建と国民の幸福に尽くそうとする姿勢が伺える。ピックスの言う通り、昭和天皇は戦争責任を認め、それを国民に謝罪しようとしていたことが伺える。

昭和二三年一月二三日、東条英樹元首相をはじめとするA級戦犯七人が、東京裁判で有罪となり戦争責任を負って処刑された。こ

の昭和二三年に書かれた草稿が日の目をみることなく終わった理由の一つは、天皇が謝罪表明を行わなくとも、天皇の戦争責任は回避され、天皇の留位と皇室の存続は保証されたとみただからであろう。

一九四四年四月号『フォーチュン』

六〇年前に戻り、一九四四年四月号『フォーチュン』のコラムをみてみよう。この日本特集号には「本誌を救うために」という編集者の読者に対するアピールが掲載されている。

〈四四年四月号〉

本誌を救うために

戦時なので発行部数は十分ではない。この『フォーチュン』を友人とわけ持つて欲しい。今年、『フォーチュン』は戦時産業局に協力し、当社発行の『タイム』、『ライフ』、『アーキテクチュアル・フォーラム』と併せて、一昨年より七千三百万ポンド(千四百五十台の貨車積載量に相当)の紙を節約しなければならなかった。

本誌が日本特集号を組むのはこれが二度目で、最初は一九三六年九月号であった。記事はアーチボルド・マクリーシュ(Archibald MacLisla - 現連邦議会図書館長)とワイルダー・ホブソン(Wilder Hobson - 現タイム編集者)によるもので、二人は七週間日本で取材を行ったが、取材は制限され、重工業プラントの撮影は禁止された。この特集号は天皇を扱った記事が不敬罪にあたるとして、日本では発禁処分になった。

戦争に突入して以来、『フォーチュン』には政府筋や対日軍事諜報を専攻する学生から、日本特集号を欲しいとの要望が殺到し

た。

こうした事情が『フォーチュン』の編集者にまたとない好機を与えてくれた。日本に関する公的情報を流す必要性がかってないほど高まり、三六年に出版した日本特集は高い評価を得たのだから、それを今日的な記事にして再版して欲しいという声が高まり、基本的には「再版」することに決めた。今度の特集号と前の三六年の特集は類似した箇所がある。我々が期待を上廻る量の新しい情報の発掘に成功しなかったら、類似点はさらに多くなっていただろう。集まった情報は、新しい特集号を出してもおかしくないほどの量であった。読者は一九四三年一月号『フォーチュン』を思い出して欲しい。ここでは日本の戦争と経済の問題を討論した座談会にかなりの誌面を割いており、カール・ルース (Carl Lousé) による日本人の心についての分析や戦略上の角度からみた日本の地図などが掲載されている。

今回はリポーターを日本に送ることはできなかったが、その筋の専門家の知恵を借りることができた。一人はヘリモン・モーラー (Herimon Maurer) で、一九三八年から一九四〇年まで四川省成都の南京大学で亡命者のための英語の教師をしていた。この間、彼は極東文化の研究のため、数週間日本に滞在し、一九四一年には『終末は来らず』という戦時の中国に関する著作と『旧友』という哲学者老子に関する評伝を書き、一九四二年にフォーチュン誌の編集に加わった。彼のこの度の特集号に関する貢献は測り知れないものがある。最も重要な記事の三つを書くかわら、全ての記事の構成について共同編集者の役割を果たした。

客員編集者のクロード・A・バス (Claude A. Buss) は日本の捕虜収容所に四三年九月までいて、一二月にグリッブスホルム号

〈引揚げ船〉でアメリカに戻ってきた。彼は『東アジアの戦争と外交』の著者であり、中国で外地勤務を体験した後、南カリフォルニア大学(一九三四—一九四一)で国際関係論を講義していた。また、一九四二年一月、日本がマニラに侵攻した時点では、フィピンにおける合衆国高等弁務官の一人でもあった。

マニラにおける六カ月にわたる拘留の後、バスは東京に送られた。そこで、その筋によって用意された教科書や新聞で日本語を学習し、日本の新聞を注意深く読み込み、その底に潜んでいるものを鋭く嗅ぎつける能力を身につけた。この号のドキュメントは、彼の素晴らしい記憶力と極東に関する豊富な知識によるものである。

グリッブスホルム号には、雑誌『ライフ』のカメラマンのカー・マイダンス (Carl Mydans) と彼の妻(『ライフ』のレポーターであるシェリー・スミス・マイダンス (Stelley Smith Mydans)) も乗っていた。彼女は『大東亜共栄圏』と『ジャップがマニラに侵攻してきた時』の章を執筆している。八ヶ月半に及ぶマニラでの抑留の後(そこで彼女は毎日三時間、コメ缶から虫をつまみ出す作業をしていた)、夫妻は輸送船で上海に送られ、収容所に入れられた。

シェリー・マイダンスはマニラで日本兵がフィリピン人を殴るのを目撃した。上海でも、中国人が同じように扱われているのを見て、「アジア人のためのアジア」という言葉の真の意味を悟った。帰国の途上、彼女は政府機関によって集められた広範囲にわたる素材に基づいた結論と彼女自身の観察とで「日本人のためのアジア」(大東亜共栄圏)という章を纏めた。

二人の特派員

一九四四年四月号の『フォーチュン』には、「三六年の日本特集号はアーチボルド・マクリーシュとワイルダー・ホブソンの手になるものであり、取材制限の中、二人は七週間日本で取材を行った。この特集号は天皇に対する不敬罪にあたるとして日本では発禁処分になった」とある。

タイムの社主ルースが日本に送り込んだ二人の特派員とはどのような人物だったのか？ もし、その記事が日本や天皇のイメージを決定的なものとし、あるいはその可能性のあった記事だとするならば、それを書いた二人の特派員の資質やキャリアを辿る必要がある。日本を取材した時、マクリーシュは四四歳、ホブソンは三〇歳である。そのキャリアからみてもマクリーシュが主筆であったことは間違いない。ホブソンは若手特派員として厳しい取材制限に辟易としながらも足で稼いでいたのだろう。

アーチボルド・マクリーシュ（一八九二～一九八二）



アーチボルド・マクリーシュ
(1892～1982)

特派員の一人であるマクリーシュは、ルースがもつとも信頼していた記者であった。二人はエール大学在学中に知合い、キャンパス

の楡の木陰で、文学や思想を語り合った仲である。ルースが最初の結婚をする時も、それを真つ先に打ち明けたのはマクリーシュだった。ルースが新しい経済雑誌『フォーチュン』を企画していた一九二九年、マクリーシュは結婚してパリに夫人と滞在し、詩作を続けていたが、アメリカに戻ったところをルースにスカウトされた。

『フォーチュン』を発刊するにあたり、ルースはベテラン・ジャーナリストより、アマチュアでもみずみずしい感性をもつ記者の目で誌面を埋めたいと考えていた。ルースは嫌がるマクリーシュを膝詰め談判で口説いた。マクリーシュは、結局『フォーチュン』の記者を引き受けるのであるが、その時、出した条件は詩作に差し支えない「パートタイム」の記者というものであった。

マクリーシュの詩集『コンキスタドル』（征服者=Conquistador）は、一九三三年にピューリッツァー賞を受賞している。彼は優れた詩人、文学者、評論家でもあった。詩やドラマで三回ピューリッツァー賞を受賞、劇作ではトニー賞を受賞し、ドキュメンタリー『エレノア・ローズヴェルト』ではアカデミー賞を受賞している。エール大学を卒業した後、彼はハーバード大学ロー・スクールで法律を学び、その後、ボストンで友人と法律事務所を持ち、ハーバード大学の教壇に立つなど、この時すでに成功した法律家でもあった。

『フォーチュン』を中心に活躍した彼の言論活動に対しては、左翼はファシスト的、右翼は共産主義の同調者だと攻撃している。確かに彼はニューディーラーではあったが、ジャーナリストとしては正道を行っていたということだろう。

マクリーシュは三六年の日本特集を取材した後、しばらくして『フォーチュン』を去り、ローズヴェルト大統領に請われて、三九年からは連邦議会図書館長を勤める傍ら大統領のブレインを務め

た。

ローズヴェルトは彼を信頼し、大統領演説の草稿を任せることになる。マクリーシユはローズヴェルトの実質的なスポークスマンであり、政策立案についてのアドバイザーの役割も果たした。

第二次世界大戦中はOWI（戦時情報局）の局長を務め、四三年には大統領直属の秘密委員会の主要なメンバーとして、大戦後の国際連盟のあり方や占領後の日本に対する施策を検討している。

その間密かにタイムの社主ヘンリー・ルースとローズヴェルト大統領との間を取り持ちたりもしている。一九四四年四月の『フォーチュン』日本特集号の出版や四四年一二月の縮刷版の出版には、戦時情報局にいたマクリーシユの力があつたと思われる。ローズヴェルト大統領が死去した後、トルーマン政権においてマクリーシユはジェームズ・バーンズ國務長官の國務次官補を務めている。マクリーシユは大平洋戦争最中から、アメリカの政策決定の中枢にいたのである。

ワイルダー・ホブソン（一九〇六―一九六四）

もうひとりの特派員ホブソンもエル大学の出身であり、大学時代から自ら主宰する『エル文学』（Yale Literary Magazine）に詩を載せたりしていた。彼はルースとマクリーシユの後輩、つまり、「エル・ペデグリー」（エル大学関）であった。

ホブソンは、昼は『フォーチュン』、『タイム』、『ニューズウィーク』の第一線のジャーナリストだったが、夜は、マンハッタンの下町で、バーボン片手にジャズを聴く生活を送っていた。また、自らも演奏してジャズを楽しんだ。三九年にホブソンが出版した『アメリカン・ジャズ・ミュージック』は、ジャズについての初めての本

格的な評論であり、黒人のみすばらしい音楽でしかなかったジャズを「魂の音楽」として評価した最初の著作であった。三〇年代といえば、デューク・エリントンやルイ・アームストロングなどが活躍した時代である。ホブソンの『アメリカン・ジャズ・ミュージック』は、ベストセラーとなり、折から普及したラジオの影響もあって、ジャズは市民権を得ることになる。ホブソンはアメリカのジャズの歴史にその名を刻んだ男でもあった。

日本特集は異色のキャリアを持つこの二人のジャーナリストによって書かれたのである。彼らは日本の国家体制のみならず、広く庶民の生活や農村部にまで足を伸ばし、記事にしている。

『フォーチュン』は天皇をどう扱ったか？

三六年九月と四四年四月、さらに四四年一二月の『フォーチュン』日本特集号で、「天皇」に関する記事はどう変ったのか？

三六年九月の日本特集号は、『大日本帝国を動かしているのは誰か？ Who Runs the Empire?』

という章では、まず、帝国に君臨する天皇の存在を強調し、天皇のルーツを辿っている。

〈三六年九月号〉

天皇は神話から生まれた存在であり、アーサー王の魔法の剣、ニーベルンゲンの指輪、アラジンランプ、オルフェウスのたて琴、ゼウスの雷（いかにもマクリーシユの文章を思わせる）……つまりその持ち主に絶対的支配権を与える神話上の象徴を継承する家系の末裔である。言い換えれば、歴史上、天皇は支配者であつ

たことはなく、その存在を巡って支配権が行使された。明治憲法は、「国家すなわち天皇であり、天皇すなわち国家」と定めた。現在（一九三六年）の天皇は「よみがえったメデューサの首」であり、皇室の権威は目も眩むばかりに維持されている。そして、その天皇を操るのが寡頭政治（Oligarchy）である。

（四四年四月号）

天皇は国家を具現するものであり、天皇すなわち日本である。とすれば、天皇の利用価値は大きい。古来から実権を手にしたものは、天皇を利用してきた。

天皇の権威は、いかなる時も、天皇の名にあるのであって、天皇個人ではない。天皇の名における詔勅だからこそ、宣戦布告の詔勅も神の法としての権威が備わるのである。

「軍人勅諭」は、日本陸海軍のバイブルである。明治天皇の名における勅諭は、強制を伴う厳しいモラルと化す。これに従わず敵に降伏するものは理由の如何を問わず、天皇に背くものであり、国家、神、家族を裏切るものであるとして断罪を受けることとなる。

しかし、七十年前は、天皇の名もこれほど重みがあつたわけではない。列強諸国による植民地支配に陥ることなく、独立を確保するに足る強力な日本を目指す中央政府は、天皇という存在に民族のこころを結集し、国家の改造をはかる必要があつた。この状況から、古来の神道の伝承が装いを新たにし、天皇を民族の象徴と考える新しいイデオロギーを支えることになる。

として、二つの日本特集とも天皇は支配権を持たず、時の支配者に利用される存在であるとし、明治政府が列強に伍して強力な国家を作り上げるためには、天皇を日本帝国の象徴とみなすイデオロギーを必要としたと説明している。

三六年の特集では、天皇を擁するものが天皇の名のもとに支配権を行使したとして、寡頭政治の元老、薩摩と長州、軍部（陸軍）と官僚、財界を挙げており、こうした支配者たちが天皇の名において国政を担当したとしている。「天皇」の扱いは、三六年九月と四四年四月の特集号に一貫した姿勢がみられる。

（三六年九月号）

天皇は主権の源ではなく、その「機関」であるという美濃部教授のリベラルな考え方は、官僚には支持されたが、陸軍には攻撃された。美濃部教授は告発され、翌年には暴漢におそわれるという事件が起こった。（中略）

高橋大蔵大臣のみが、国防のためにすべてを犠牲にすべきだと云う陸軍の主張をあえて否定した。高橋は国防費の増額を要求する陸軍に反対して、日本はどの方面からの宣戦に対しても十分に防備が敷かれていると言つたと報告されている。この発言で彼は三ヶ月後に命を落とすはめになった。

陸軍に対する強い反感が二・二六の陸軍の暴力行為を惹起し、それがさらに陸軍に対する反軍意識を強めていった。しかし、天皇が反乱に対して遺憾の意を表わしたことで、陸軍の人気は回復されなかった。

二人の特派員が来日した一九三五年秋は、岡田啓介内閣が美濃部

達吉の「天皇機関説」に対して「国体明徴声明」を出した直後であり、軍部の革新派の国内改革に期待し、それを推進しようとする言論がジャーナリズムにおいて支配的だった頃である。天皇機関説を否定するということは、天皇は国家を超えた存在、つまり「現人神」であることを肯定することになる。こうした軍部の独走を目のあたりにして、マクリーシュは「操られている天皇説」を強く意識したのかも知れない。後段の二・二六事件は、彼らが帰国してから起きており、締切直前にインサートされたものである。

三六年九月号で天皇を扱った章のタイトルが『大日本帝国を動かしているのは誰か? Who Runs the Empire?』であるのに対し、四年四月号では『天皇を操っているのは誰か? Who Runs the Emperor?』と変わり、天皇が操られた存在であることがさらに強調され、記事の内容は在位中の昭和天皇へと絞られ具体性を帯びる。

〈四四年四月号〉

現在在位の天皇はその名を裕仁という。年齢は四三歳。テニスとゴルフの腕は十人並みの海洋生物学者であり、「平和」を主題とする歌を詠み、眼鏡を掛け、政府の外交政策と軍の作戦行動には苦りきっている。したがって万が一、天皇が自ら意を決して隠れんとん生活を送ろうとも、幽閉されて無力となろうとも、それは微々たる問題にしかなるまい。

テニスをする海洋学者の昭和天皇が政治的には無力な存在であり、敗戦後に天皇がどう身を処そうとも国家にはさして影響がないとしている。

もうひとつ、四四年四月の特集号には、当然のことながら戦場向き合う敵の首魁としての昭和天皇がある。

玉碎した将兵たちは皆「天皇陛下万歳!」と唱えて散っていった。天皇こそが日本人の生きる根拠であり、天皇のためには臣民は喜んで命を抛つ。

一九四一年一〇月、東条が首相となるころには、政府は軍の管制下にあつたと云つてよい。今や天皇を操っているのは軍部である。しかし、軍部も一見強固にみえるが、内実はバラバラである。

ここでは、天皇を操るものは軍部であるが、その軍部も一枚岩ではなく、陸海空がそれぞれに独立した司令部を持ち、さらに陸軍の権限は参謀総長、陸軍大臣、教育総監と三分され、海軍の権限は軍令部総長、海軍大臣と二分された構造を持ち、これらの間に上下関係はないことを指摘している。

〈四四年四月号〉

日本の政治の要諦は「根まわし」にある。「ほんね」は妥協でありながら「たてまえ」は対立する勢力が国を思う心で連携する。手の内を知り尽くした上での駆け引きである。日本の最上層部は、この拮抗する勢力を天皇の名においてバランスを保ち、御することで権力を保っている。

四四年四月の『フォーチュン』と、四四年一二月の縮刷版『フォーチュン』を比較しても、天皇に関する記述はまったく変わっていない。ただ、敗戦濃厚となった戦況、サイパン陥落後、東条首相が罷

免されて小磯内閣が誕生したという推移が付け加えられているに過ぎない。(発刊時の陸海軍による小磯、米内連立内閣では、終戦は望めないとしている。事実、終戦はこの後の鈴木寛太郎内閣の手に委ねられているから、縮刷版の予言はあたっている)

以下が縮刷版につけ加わった記述である。

〈四四年二月縮刷版〉

軍が天皇を奉じて、政権の座に就いているが、一九四四年二月のトラック島、七月のサイパン陥落と、敗戦が迫り来るを知らなからも、寄合い所帯である政府内での見解はますます開き、政略論争は厳しさを増している。政権は今なお軍の手中にあるとはいえ、その政府は、連戦連敗の軍と同じで、強力であり得る筈はない。

すでに東条は姿を消し、小磯陸軍大将、米内海軍大将という陸海軍の連立政権だが、この内閣は歴史上かつてない破滅的狀況にある。無敵皇軍の夢は消え、迫り来る破滅があるのみで、国内外の問題が山積している。アメリカ軍の反攻が刻々と残された領土に迫り、その迎撃や防衛に追われる中で、和平のための微妙な戦機を暗中模索せねばならない。

四四年四月号に戻ると、「天皇を操るものは誰か？」では、正装をして馬車に乗る昭和天皇の写真が掲載され、そのキャプションは下記の通りである。

天子 (The Son of Heaven) は大元師の正装に身を包んだ小男である。実権はないが、制度上の地位は高い。彼の職務は、写真

のように厳しい顔の四人の軍人をトップとする権力集団に利用されることである。

その天皇を操るものとして、『フォーチュン』は軍部四人、民間人四人、右翼・財界人四人の顔写真を掲載している。キャプションは次の通りである。

日本を支配する軍部

◆軍人出身の四人

東条Ⅱ首相。幾つもの大臣を兼任。陸軍総司令。あだ名「カミソリ」のような行動力を持つ。

寺内Ⅱ俊敏な陸軍元帥で最高司令長官。

古賀Ⅱまだ、未知数の連合艦隊司令長官。

嶋田Ⅱ海軍大臣。かつては彼の艦隊が四海を制覇したことを誇ったこともあった。

◆影響力を持つ民間人四人

近衛Ⅱプリンス。意志薄弱で強度の憂鬱症。妥協に長け、三度総理大臣を務めた。

今や、「新元老」という名の長老政治家の一人

松平Ⅱかつての駐米大使。宮内大臣というポスト上、天皇への謁見を取次ぐ権限を持つ。

重光Ⅱ上海で命を狙われ、爆弾で片足を失った。現職の外務大臣。

樽では、東条内閣の穏健派だということである。

後藤Ⅱあまり目立たない、慎重な国務大臣。翼賛政治体制協議会副会長。

◆丸縁眼鏡の大日本帝国の建設者四人―これら眼鏡の男たちが帝国の勢力伸張に貢献した。

頭山II鬚づらの右翼。八九歳だがまだバワフルで、黒竜会に後援されている。

軍部の極右と歩調をあわせようとしなない公的人物の暗殺にかかわる。

星野II内閣書記官長で事実上の副総理。満州国建国と日本への利益誘導方針を企画。

東条の信任厚い民間人のひとり。

藤原II國務大臣。前歴は新聞用紙を独占する三井系の会社(王子製紙)の社長。

内閣における実業界の代表。

青木II官僚。日本の栄光ために占領地域を支配する大東亜共栄圏担当大臣。

東条英機、寺内寿一、古賀峯一、嶋田繁太郎、近衛文磨、松平恒雄、重光葵、後藤文夫、頭山満、星野直樹、藤原銀次郎、青木一男という一二名の写真とそのプロフィールを紹介している。寺内、古賀、近衛、頭山の四名を除けば、すべて四四年四月号『フォーチュン』の出版時における東条内閣の閣僚たちである。

『フォーチュン』は、記事の中で、歴史を見通した上で、日本の政治の要諦は「根まわし」にあり、その仕上げに天皇が利用されたのだということを描いている。

『フォーチュン』一九四四年四月号の「戦後の対日処理」では、天皇と天皇制の問題について次のように述べている。(一二月の縮

刷版と変るところはない)

(四四年四月号と四四年一二月縮刷版共通)

対日処理をめぐる議論の焦点は天皇に絞られる。ひとつの考え方として、日本人の心情には、最初から侵略を助長するようなものはなかったと考へ、この戦争を軍閥の責任か、そうでなければ、世界的な経済法則のなせるところに過ぎないとする見方もある。この考え方からすれば、混乱を元に戻すべく天皇か、それとも、まだ十一歳で問われるべき責任のない明仁皇太子に望みを託すことになるのも仕方ないところである。天皇は、事ある度に、いつもかたづけ出されてきた。政策担当者のなかにも、国際連合は天皇をかつぐべしという説がある。軍閥を追放し、自由な政治、経済のためには天皇を旗印にしたほうがよいのである。天皇を錦の御旗として、その陰で政治や経済をコントロールしたほうが都合が良いという考え方である。だが、日本の侵略戦争の根源は単に外交や貿易にあるのではない。それは日本人の心情や社会構造の深淵から発しているものであり、この危険な社会的、心理的構造の要が天皇という存在なのである。そればかりではない。天皇をかつぐという発想からすれば、天皇が定めた(欽定)民主主義の発布ということになり、それは近代民主主義にとって前代未聞のことといえよう。天皇の意向を持つてしても敗戦は免れ得なかつたとなれば、皇位は保ち難い。もし、保ち得たとしても天皇に関する神話までも認める筋合いはない。天皇を中心に据え、忠君愛国、特権階級の専制政治、軍の進軍ラッパが一体となって近代日本が成立していたのである。天皇がある限り、日本人の心は旧態依然であり、それにとらわれては、束縛から逃れ得ない。ま

して、世界に伍することなど思いもよらない。

たしかに、国際連合として、天皇を退位させたりすることは、とんでもない愚策である。が、戦後の日本において、天皇に心を寄せる連中や、天皇制を守ろうとする政府には、監視の眼を怠るべきではなからう。

いうまでもなく、我が方が、無条件降伏の申し入れを受ける相手は天皇であり、それは、こちらにとっても好都合であろう。だが、降伏の申し入れが天皇からであったとしても、天皇を承認したとさせざるわけには行かない。天皇との接触はこれで終わりとするのである。以後は天皇との接触は一切これを拒否して、日本を議論の渦に巻き込むのだ。我々の立場としては、そのなかから、日本人が、自らの政府を組織し、運営し、最善を尽くすのを待つのみである。

戦時に出版されたアメリカの一経済誌が、その後の日本における天皇の地位に影響を与えたとは必ずしも思えないが、占領後の日本をコントロールした占領軍やGHQのスタッフが、これら『フォーチュン』の記事を読んでいた可能性は高い。また、日本特派員として最初に天皇を記事にしたマクリーシュが大統領のブレンソンとして秘密委員会をリードし、トルーマン大統領の國務次官補として戦後の占領政策を立案したことを考えると一連の『フォーチュン』日本特集の持つ意義は大きい。

一九九〇年以降、その存在が明らかになった文書がある。寺崎英成(当時、天皇御用掛、開戦時の在米日本大使館一等書記官であり、ゲン・マリコ・テラサキの父)の聞き書きによる『昭和天皇独白

録』(文藝春秋、一九九二)とその英語版である。一九九七年まで公表されることになかったこの英語版は、マッカーサー司令部に提出されたものとみられている。そこに書かれている天皇の独白を読むと「東条内閣の開戦の裁可は立憲君主としてやむを得ぬことであり、自らは軍国主義の無力な傀儡だった」ことを強調している。これは、この章の冒頭で触れた謝罪詔書草稿とは矛盾している。天皇の名によるマッカーサー司令部に対するアピールと国民への謝罪草稿との間に、意図的な乖離があったと考えるべきであろう。

二〇世紀末、昭和天皇の崩御後、世に出てきたこれらドキュメントに基づいたビックスの『昭和天皇』は、「天皇と日本の支配層が、天皇を戦争責任から擁護しようとし、マッカーサーも占領統治にあたり、天皇を含め既存の枠組みを利用しようとした。」「天皇の免責に異議を唱える必要性をいっそう強く自覚しているが、その取り組みは、世界秩序を維持する時代の戦略方針によって踏みにじられている」という。

戦時中から連合国諸国の間では、敗戦後の日本の占領政策を遂行するにあたり、天皇をどう取扱うか、天皇制を廃止すべし、存続すべしという二論に分かれて議論されていた。廃止派は、軍閥と財閥の中核に位置する天皇こそが、狂信的な膨張主義を招いたとして、天皇の存在をなくさなければ、民主的な国家の再建はありえないとする見方であり、存続派は、天皇を軍隊と切離した存在として捉え、天皇をこれからの社会の統一と安定を保つために必要な存在とする論である。しかし、両者いずれも、天皇至上のイデオロギーと社会構造を解体させることは共通していた。

バーンズ長官率いる米國務省筋は戦後、天皇制を廃止、天皇に戦

争責任ありとして絞首刑にすべきとの方針を打ち出している。

結局、天皇の存在は日本の民主化遂行に天皇を有効とするマッカーサー司令長官の現実認識によって認められたのである。

『フォーチュン』は、天皇は軍や財閥に操られた存在であり、天皇制を存続させるか否かは、日本人自らが決めることだとしながらも、天皇を頂点とする社会構造は徹底して解体されるべきことを説いている。

敵としての昭和天皇を、太平洋戦争と同時進行しながら分析した月刊誌と、六〇年の歳月を経て、過去の資料を検証したビックスの『昭和天皇』を同次元では論ぜられないが、『フォーチュン』日本特集号の記事は、戦後の日本に関する米の占領政策の骨格を感じさせるものであり、マッカーサー司令部が選択した現実の路線は、結果的には、『フォーチュン』のシナリオに沿ったものであったといえるよう。

戦時において、雑誌『フォーチュン』が天皇の存在や日本人、あるいは日本国家を単なる敵としてではなく、その歴史をひも解き、文化を理解し、占領後の日本が独立した後までもロング・スパンに見据えていた。

『菊と刀』

ここで、『フォーチュン』の日本特集号と『菊と刀』の関係についても触れておきたい。

文化人類学者ルース・ベネディクト (Ruth Benedict) の『菊と刀』は戦後の一九四六年、アメリカで、その三年後には日本で出版されてロングセラーとなった。その理由のひとつは、切り口の新鮮さだ

ろう。文化人類学 (General Anthropology) という概念すら日本になかった時代である。もうひとつは、日本人のメンタリティを『菊と刀』という言葉で表したその鮮やかさにある。そして戦時中、アメリカが日本をどう観ていたのかを日本人はこの書で初めて知った驚ろきがあった。

アメリカでは、『菊と刀』の内容のほとんどは、戦中から「情報」としてOWIに上げられていた。ベネディクトはその序文で「報告する課題を与えてくれた戦時情報局、とりわけ極東部次長と外国戦意調査課長に謝意」を表明している。また、本文でも「一九四四年六月に日本研究の仕事(戦時情報局から)委嘱された。私は、日本人がどんな国民であるかということを知くために、文化人類学者としての私の利用し得るあらゆる研究技術を利用して欲しいという依頼を受けた」とも書いている。

彼女がその序文でとりわけ感謝しているのは、戦争中、同僚であったロバート・ハシマで、彼はアメリカで生まれ日本で育ったが、一九四一年アメリカに戻って来て、隔離収容所に抑留された。その後、アメリカ軍機関に勤務するため、彼がワシントンに出て来た折に、私は彼に出合ったとして、その分析の多くが彼からのヒアリングだと述べている。

ベネディクトは戦時情報局OWIの海外諜報機関BOI (Bureau of Overseas Intelligence) のさらに下部組織である敵国民意分析部門F MAD (Foreign Morale Analysis Division) に所属していた。一九四四年に設立された海外諜報局の諜報活動は、戦後における日本の占領政策をもその視座に入れていた。『フォーチュン』特派員として日本をレポートしたマクリーシュは戦時情報局の局次長として指導的な役割を果たしており、日本というフィールドを踏んだことの

ない文化人類学者ベネディクトが上司マクリーシュの書いた『フォーチュン』日本特集号を読んでいない筈はないのである。

ベネディクトは戦時情報局の依頼を受けて、隔離収容所から出て同僚となった日系二世の話や海外諜報局が手に入れた日本映画を徹底的に分析した日本レポートを戦争中から戦時情報局に提出し、戦後のマッカーサー司令部の占領統治を確認した後に『菊と刀』を纏めたのである。

米課報局で働いた日系人は数多い。先に触れた八島太郎もその一人であった。『菊と刀』の天皇に関する記述を『フォーチュン』と比較すると、天皇を操る寡頭政治の存在を指摘するなど共通するところが多いのはこのような理由によるものであろう。

ベネディクトは『菊と刀』で、天皇をどう扱ったか？その一部を抄訳として記しておく。

アメリカの戦時政策が、天皇を処理するにあたってキッド革の手袋をはめる（生温い手段を取る）必要はない。天皇こそは国家神道の心臓であり、もし、アメリカが天皇の神聖性の根底を掘り崩そうとするならば、敵国日本の全機構は大黒柱を引き抜かれた家のように瓦解するだろうとする意見もあるが、「日本を知るものは、天皇に対する侮蔑的言辞や攻撃ほど日本人の憎悪を刺激し、戦意を煽り立てるものはない」ということをよく知っていた。日本人の天皇崇拜は、ハイル・ヒトラー崇拜とは同じように論ずるわけにはいかない」というのが、日本に居住した人々の主張である。日本人俘虜の証言はこの説を裏書きした。最後まで頑強に抗戦した俘虜たちは、その極端な軍国主義の源を天皇においていた。彼らは「天皇の命令のままに身命を捨てた」、その言い分は「天

皇が国民を戦争にお導きになったのである。それに従うことが私の義務であった」ということであった。一方、今度の戦争を否認していた俘虜たち、戦いに倦み疲れた人たちは、天皇を「平和を愛好される陛下」と云い、「陛下は自由主義者であり、戦争に反対しておられた」と主張した。「陛下は東条に騙されたのだ」「天皇は戦争を好まれない、したがって国民が戦争に引きずり込まれるのをお許しになる筈はなかった」とも云う。日本の俘虜たちはドイツの俘虜とは違って、皇室に捧げられる崇敬と軍国主義、侵略戦争政策とは切り離しうるものであると断言した。

天皇は、彼らにとって日本から切り離すことのできない存在であった。

「天皇のない日本なんて考えられない」「天皇は日本国民の象徴であり、国民の宗教生活の中心である。天皇は超宗教的対象である」。たとえ、日本が戦いに敗れたところで、敗戦の責任は天皇にはない。「天皇のお言葉のみが、日本国民をして敗戦を承認せしめ、再建のために生きることを納得せしめることができる」としている。この天皇に対する無条件、無制限の忠誠は、天皇以外の他のすべての人物および集団に対してはさまざまな批判が加えられる事実と好対照を示していた。

そして、「尊王攘夷」と「王政復古」から発した明治維新、それと大日本帝国憲法が、国家神道と天皇を階層制の頂点に据える中央集権的支配を一段と強化した。憲法によって、人民が国政に参加する道が開かれ帝国議会が設置されたものの、天皇は少数の階層制の首脳部を占める人々「閣下」のみが「拜謁」できた。

ルース・ベネディクト 菊と刀―日本文化の型―

長谷川 松治訳から

『タイム』に見る天皇像

同じタイム社が出版する週刊誌『タイム』に載った戦時における天皇像はどのようなものであったのだろうか？『タイム』は『フォーチュン』以上にアメリカ世論に大きな影響を持つ週刊誌である。一九四〇年代において週刊誌『タイム』の発行部数は、月刊誌『フォーチュン』の八倍であり、値段は『フォーチュン』の二ドルに比べて、一五セントであった。そして、週刊誌の常として、記事は月刊誌『フォーチュン』より過激であり、センセーショナルであった。

放送といってもラジオのみで、活字ジャーナリズムの世論に与える影響は大きかった。AP通信の記者で、戦時中はジャーナリズムの検閲の仕事をしていたバイロン・プライス (Byron Price) は『タイム』を「驚くべき暴露にみせかける軽薄な言葉の操作」をしているといて嫌った。通信社や新聞社が週刊誌を「暴露的なイェロージャーナリズム」と批判するのは今に限ったことではない。

『タイム』の表紙にみる大平洋戦争と天皇像

『タイム』は創刊以来、幾つかの例外を除けば、常に「時の人」を表紙にしてきた。その週、もつとも注目された、あるいは注目されると『タイム』が判断した人物が表紙を飾るのである。それは写真に手を加えて絵にしたような人物像であり、その像には明らかに編集者の意図が込められている。たとえば、一九四一年一月二二日号の表紙に登場した山本五十六司令長官の顔は、本人にいくらか似ているところもあるが、どうみてもガマ蛙のような悪相に描かれている。山本長官憎し！があらわになった絵であり、キャブションには「日本の侵略者山本提督 彼こそあのすさまじい不信行為の大胆不敵な実行者」とある。

週刊誌『タイム』の表紙を誰にするのか、そして「マン・オブ・ザ・イヤー」を誰にするのか、それは社主ヘンリー・R・ルースにとって一つの武器であったともいえる。



1941年12月22日号



1945年5月21日号

『タイム』の表紙に載った昭和天皇と
山本五十六連合艦隊司令長官

昭和天皇が『タイム』の表紙に登場するのは、終戦間近の四五年五月二一日号（一九三三年に表紙に登場して以来一三年振りの登場）である。ドイツが降伏した直後であり、次は日本だということなのである。その二週間前の表紙はバツ印のついたヒットラーであった。表紙のデザインは大元帥の軍服に身を固めた昭和天皇の首から上のショット、背景には朝日にたなびく雲海と羽衣を纏った天女が何故

か抜き身の日本刀を持っている構図である。キャプションには「天皇裕仁」「何時まで続くこのアナクロニズム？」とある。

四五年五月二一日号『タイム』の天皇に関する記事の抜粋を記す。

〈一九四五年五月二一日号『タイム』〉

戦局がヨーロッパから太平洋に移ると合衆国は恐るべき事実面に直面した。何とこの戦いは神との戦いであつたのだ。すでに合衆国の艦隊が神の国の外壘を砕き、爆撃機が神の国の都市を粉砕し、米陸軍は彼の聖なる本土を侵略する準備をすでに整えているのである。侵略者によって教会の神聖が犯されるように、それは神の尊厳に対する冒瀆であろう。

アメリカ人の殆どは「神聖なるもの」については無知である。

一九三二年、天皇が『タイム』の表紙に登場した時、日本人はこう要求をしてきた。書店でこの雑誌を売る際、平積みで上の方へ顔が向くように雑誌を置き、天皇の肖像（御真影）の上にもものを置くことは許されないといいものであつた。合衆国民にとっては、この神はいささかで出歯でガニ股であり、胸は薄く眼鏡を掛けた小男のようにみえるのだが、七千万の日本国民にとつては神聖な存在なのだ。

不可解な敵を把握するにつれて、アメリカ人は徐々にではあるが、日本人の心というものを実感し始めた（カルチャーとしては全く宇宙人のように理解しがたい存在であり、非現代的なること、ほとんどネアンデルタル人のようだ）。日本人にとっては、天皇裕仁すなわち日本である。敵の全てが天皇という存在に具象化されているのである。

太平洋戦争開戦直前から『タイム』の表紙に載つた日本人を写真とキャプションで辿ると

一九四一年一月三日号 「日本の東条（首相） 今度は陸軍の出番！」

一〇月首相就任で注目を集めて、掲載されたものであろう。軍服姿の東条英機。

背景には、日本と中国北東部（満州）の地図が描かれている。

一九四一年二月二日号 「日本の侵略者山本提督 彼こそあのすさまじい不信行為の大胆不敵な実行者」

真珠湾攻撃から二週間後の刊行で、胸の勲章が強調されている山本五十六連合艦隊司令長官のカリカチュア。

背景は戦艦の巨砲のつもりか？

一九四二年三月二日号 「山下、日本のブリッツクリーガー（ナチス親衛隊の若い大尉）山下奉文陸軍大将は四二年二月シンガポールを占領し、英軍パースバル將軍に降伏を迫つた。

一九四二年八月三日号 「日本の板垣 好機到来と喜ぶ」

板垣征四郎陸軍大将、陸相として国家総動員法を追加発動した。

一九四三年二月一五日号 「日本の永野（開戦時の海相） 彼もまた戦場に」

永野修身（軍令部総長としてハワイ奇襲作戦承認）海相の背景には「大和」か「武蔵」を想わせる大艦の巨砲が描かれている。

一九四三年一月八日号 「日本の古賀（連合艦隊司令長官）彼の艦隊は今何処に？」

古賀峯一連合艦隊司令長官（山本五十六長官の後任）。

一九四四年七月三日号 「嶋田〈海相〉 ニミッツ〈提督〉い
わく、

「こいつらを怒らせることしか出来ない」
嶋田繁太郎海軍大臣の背景には沈み行く日本の艦艇が描かれ
ている。

一九四五年八月二〇日号「日の丸にバツ印」

国旗「日の丸」にバツ印をした表紙である。ドイツ降伏の際
(一九四五年五月七日号)は、ヒトラーの顔にバツ印であっ
た。これにキャプションは不要だ。



1945年5月7日号



1945年8月20日号

これほど多くの日本人が、短期間に『タイム』の表紙を飾ったこ
とはなかった。表紙の人物は、天皇を除けば、すべて戦死(山本、
古賀)したか、東京裁判で戦争犯罪人として絞首刑となった(山下
はマニラで処刑)か、裁判中に病死した陸海軍の将軍である。

天皇は必要とされるだろうー『タイム』より

終戦特集の一九四五年八月二〇日号『タイム』の記事の中には、
天皇について次のように論じている。

〈一九四五年八月二〇日号『タイム』〉

天皇は外交の最高権限者である。宣戦を布告し、降伏の詔勅を
つくる。天皇の詔勅は、国民にとって唯一無二のものであり、「天
皇こそ日本」なのである。

トルーマンにとって天皇の持つ力はとりわけ重要である。彼の
見る限り、天皇のみが、アジアや太平洋に散らばる全てのジャッ
プの軍隊に対し、終戦を命じることが出来る存在なのだ。

大統領への助言者のあるものは、天皇はさわらぬままに残して
おくのが一番だというが、天皇は勝利者に対し、明確に頭を下げ
るべきだと大統領は考えている。

勝利宣言ともとれる『タイム』八月二〇日号の誌面には、勝者と
してのトルーマン大統領と敗者としての昭和天皇の顔写真が並ぶ
が、もう一人、手を挙げてVサインをしているように筆者には見え
る、躍るような足取りの紳士がフル・ショットで掲載されている。
そのキャプションには、バーンズは「天皇は必要とされるだろう」
(The Emperor will be required)と語ったとある。



『タイム』から、
ジェームス・バーンズ国
務長官
キャプションには、“The
Emperor will be required
「天皇は必要とされるだろ
う」とある。

バーンズとは、トルーマン大統領の国務長官ジェームズ・バーンズ (James Byrnes) のことで、彼はマンハッタン計画に深く関わり、原子爆弾が製造されると「原爆を日本の市街地に投下すべし、事前の警告は不要である」と主張した政治家であった。その国務次官補としてフォーチュンの日本特派員を務めたマククリーシュがいたことはすでに触れた。

「天皇は必要とされるだろう」というこのバーンズの発言は様々に解釈されよう。終戦直後太平洋に散らばっている日本兵の武装解除を含めた敗戦処理に天皇の存在が必要、これからの日本の占領政策にとって必要、あるいは日本の将来にとって必要とする解釈もできよう。バーンズの本心は武装解除などの戦後処理ということはその後の言動で判断できるが、この発言は、老獪な政治家としてあえて玉虫色にとれるようにしたものと思われる。

ローズヴェルトは一二年間、四四二三日の長きに渉り大統領を勤め、第二次世界大戦の勝利を目前に、現職のまま死去した。四五年四月、副大統領から、その後を襲ったトルーマンは、終戦時、大統領としてはまだ数カ月のキャリアしかなかった。ローズヴェルトの頃から、すでに戦時動員局の長官を勤め、マンハッタン計画を推進し、もうひとつの国家的秘密であったレーダーの開発にも関わっていたバーンズにとって、トルーマンは、ローズヴェルトと比べれば小さな存在だった。彼は、開戦時の駐日大使で四四年一二月に国務次官補となったジョセフ・グルー (Joseph C. Grew) やヘンリー・スチムソン (Henry L. Stimson) のような日本通の反対を押し切り、ポツダム宣言から天皇の在位についての保証を取り扱うようにトルーマンに進言している。トルーマンは、原爆投下にゴーサインを

出した大統領としてその名を歴史に刻んだが、それはバーンズ国務長官の進言によるところが大きかった。(この問題は第二部で触れる)

『タイム』の終戦特集は、「天皇も我らの召し使い」(His Majesty, Our Servant) という小見出しで、トルーマン大統領の後ろで老獪な外交手腕を振うバーンズ国務長官を記事にしている。

トルーマン大統領への圧力は大きい。米国民や陸海軍の軍人は、日本が敗北し、平和が来たと考えているが、これからが問題なのだ。蒋介石の中国は、天皇に対する如何なる譲歩にも反対するだろう。イギリスのアトリーは責任を転嫁し、スターリンの考えはすでにトルーマンに伝えられているものの、外交問題は山積している。

熟達した老獪な妥協の達人であるジミー・バーンズが手を出して、たぶんジャップと中国人を除けば、全ての関係者を喜ばせる答えを書いてみせた。

OWI (戦時情報局) は、サンフランシスコ、ホノルル、サイパン各地からアメリカ、イギリス、ロシア、中国に向けて、いわゆる「バーンズ・ノート」を放送した。その内容は、

降伏の瞬間から、天皇および日本政府は連合軍の最高司令官の指揮下に入らなければならない。ポツダム宣言の条項を実行するための必要な降伏条件を日本政府と日本帝国の最高司令官がサインすることになるが、それをオーソライズし、保証するためにも、また、太平洋に散在する日本の陸海空軍全てを武装解除し、戦争を止め降伏するように命令を下すためにも、天皇は必要とされる

だろう。

ポツダム宣言に従い日本国民の意志に基づく日本政府の最終判断が下されなければならない。連合軍はポツダム宣言が達成されるまで、日本に止まることになるだろう。

『タイム』と『フォーチュン』の確執

第二次世界大戦中、社主ルースの意向に沿った記事を書いたのは、『フォーチュン』より、むしろ『タイム』であった。同じ社から出版されながら、『タイム』と『フォーチュン』は全く異なる編集方針をとっていた。そして、お互いの編集方針に関して対立がなかったわけではない。

マクリーシュによって書かれた日本特集号が出版された一九三六年、スペインでは、左翼の諸党派による人民戦線政府が成立した。これに対して、大地主やカトリック教会、大資本家に支えられたフランコ將軍がモロッコで反乱を起こし、内戦となった。独・伊はフランコ將軍を支持し、大量の武器と兵員を送り、スペインはファシズムと反ファシズムの戦場と化した。ピカソは怒りを込めてドイツ軍の空爆で破壊された街『ゲルニカ』を描いている。

スペイン内戦を報道する『タイム』はフランコ支持を鮮明にした。『タイム』の総編集長でもあるルースはこの人民戦線政府を憎んでいた。『タイム』は、最初、モロッコで蜂起したフランコ軍を「反乱軍」と呼んだが、それをすぐに止めた。人民戦線政府の首相マニエル・アサーニャをその表紙とキャプションで「デブ」の「できもの」のだらけの蛙面」に描き、フランコの肖像は將軍らしく威厳に満ち、ソフトな語り口と意志を秘めた唇を持つ正義の味方として描いた。

『タイム』は、記事でも、人民戦線政府を「アカ」、フランコを「シロ」と呼び、フランコ支持の旗幟を鮮明にした。

『タイム』の海外ニュースの編集責任者ゴールズボロウ (Goldsborough) も、ルースと同じエール大学の出身であった(その頃、タイム社の主要ポストはエール・ペダグリーで占められていた)。「タイム」のキャンペーンは共産主義を嫌うゴールズボロウとルースの共同作業であった。

こうした『タイム』の偏向報道に噛み付いたのが『フォーチュン』にいたマクリーシュであった。特派員として一九三五年に来日した後、マクリーシュは人民戦線が成立した第二次世界大戦前夜のヨーロッパを取材し、『フォーチュン』にも内戦の状況を掲載していた。マクリーシュはエール大学の後輩であるゴールズボロウや友人である社主ルースに遠慮がなかった。彼は下記の内容の手紙を二人に送りつけている。

『タイム』の記事に「スペイン内戦は、シロとアカが勝手に戦っている鬪鶏のようなものだ」とあるが、人民戦線はスペイン国民に選挙によって支持された正統な政府であり、ファシストを後押ししているのは大地主やカトリック教会である。私は事実を提示することがジャーナリズムの責務であると考えているが、スペイン内戦が何のための戦いなのか？戦いが人民戦線に対する反動による許し難い侵略行為だということを『タイム』は一度たりとも提示したことはないか。

ルースは次のような返事をマクリーシュに送っている。ルースは、これからの世界はコミュニズムとファシズムによって二極化し、そ

の陣営による対立で揺れ動くだろうとみて、スペイン内乱もその先駆と考えていた。

スペイン革命は、まさに刮目すべき事態であるが、君は、この革命の目的が本当に根柢のあるものと思っているのか？ これが仮にファシストとコミュニストとの対立でないとしても、スペイン革命はその争点を明確にすることができるだろうか？ 私はそうは思っていない。

今、スペインはファシストとコミュニスト（人民戦線でもいい）という陣営に二極化している。最終的に、世界はそうなるかもしれない。だが、今はまだそうなつてはいない。君が自由主義連合と同じように共産主義を考えるとしたらそれは間違いだ。

マクリーシュばかりでなく『フォーチュン』の編集スタッフたちは、偏向するタイムの記事に対して怒りをあらわにしていた。しかし、ルースは希代の「なだめ屋」であった。彼は片っ端から編集スタッフにメモを渡し「なだめすかし」の怀柔作戦に出た。マクリーシュの書いたヨーロッパにおける政治状況も『フォーチュン』に載せた。彼は『タイム』の八分の一しかない発行部数である『フォーチュン』の影響力の限界ということも計算していたに違いない。反発して若い左翼系のスタッフの何人かは『フォーチュン』を辞めていった。そういう記者に限って優秀なので、『フォーチュン』には打撃だった。

マクリーシュは反共産主義であり、ニューディール政策の支持者であり、ファシズムは「時代が生んだ悪」であると考えていた。一九三八年、マクリーシュはルースに一通の手紙を残し『フォーチュン』

」を去り、ローズヴェルトのブレインとして働くことになる。その手紙は大学時代の友を思う気持ちが溢れていた。

君はタイム社を創設し、十分に成功した。君はこの国で民主主義の理想を訴え、それを植え付けることに成功した。君は金持ちになるうなどと思っていないことは私がよく知っている。だが、君は二十歳の頃に信じていたことを忘れるべきではない。人々の側に立つことだ。君はもともとそういう男なのだから。

〈第一部終り〉

参考文献

宇佐美承 『さよなら日本 絵本作家・八島太郎と光子の亡命』

一九八一年 晶文社

ミネ・オオクボ 『市民13660号』前山隆訳 一九八四年 お

茶の水書房

J・K・ガルブレイス 「私の履歴書」 〓二〇〇四年一月一日〓三

一日 日本経済新聞

川島一穂 「ヤスオ・クニヨシの時代と芸術」『大阪芸術大学短期大

学部紀要』第二五号二〇〇一年

ハリイ H・L・キタノ 『アメリカのなかの日本人』内崎以佐味

訳 昭和四九年 東洋経済新聞

マイケル・S・スウィーニー 『米国のメディアと戦時検閲』（土屋

礼子、松永寛明訳 二〇〇四年 法政大学出版局）

寺崎英成・マリコ・テラサキ・ミラー編著 『昭和天皇独白録―寺

崎英成・御用掛日記』一九九一年 文藝春秋

- 寺島美郎 『ふたつの「FORTUNE」』一九九三年 ダイヤモンド社
 フォーチュン編 熊沢安定訳 『フォーチュン版「大日本帝国」の
 研究』一九八三年 徳間書房
- 東京国立近代美術館編 『国吉康雄展—カタログ』二〇〇四年
 東京国立近代美術館
- 水野剛也 「日系アメリカ人仮収容所における新聞検閲」『マスコ
 ミュニケーション研究61』 日本マス・コミュニケーション学
 会 二〇〇二年
- ハーバート・ビックス 『昭和天皇』吉田裕監修 阿部牧夫・川島
 高峰訳 二〇〇二年 講談社
- ルース・ベネディクト 『菊と刀』—日本文化の型— 長谷川松治
 訳 一九四九年 社会思想社
- 山口泰二 『アメリカ美術と国吉康雄』 二〇〇四年 NHK出版
- FORTUNE
- SEPTEMBER1936, APRIL 1944,
 JAPAN ~by the Editors of FORTUNE *An American Magazine* ~Decem-
 ber,1944 OVERSEAS EDITIONS, INC. NEW YORK
- TIME
- NOVEMBER 3, 1941, DECEMBER 22, 1942, MARCH 2, 1942,
 AUGUST 3, 1942, FEBRUARY 15, 1943, NOVEMBER 8, 1943,
 JULY 3, 1944, DECEMBER 22, 1941, MAY 21, 1945,
 AUGUST 20, 1945
- RUTH BENEDICT "THE CHRYSANTHEMUM AND THE SWORD—
 Patterns of Japanese Culture" by RUTH BENEDICT HOUGHTON
- MIFFLIN COMPANY. BOSTON. THE RIVERSIDE PRESS CAM-
 BRIDGE, 1946
- Bix, Herbert P., Hirohito and the making of modern Japan, Harper Col-
 lins, 2000 First Perennial edition, 2001
- 'Japanese Americans FROM RELOCATION TO REDRESS' Edited by
 Roger Daniels, Sandra C. Taylor, and Harry H. L. Kiano University
 of Utah Press Salt Lake City, Utah 1986
- Roger Daniels "AMERICAN CONCENTRATION CAMPS A Docu-
 mentary History of the Relocation and Incarceration of Japanese
 Americans, 1942—1945" Selected and edited by Roger Daniels
 University of Cincinnati Garland Publishing New York & London
 1989 (July, 1940—December31, 1941 Daniels, ed)
- Mine Okubo "CITIZEN 13660" 1983 by the University of Washington
 Press Reprint. Originally published: New York: Columbia Univer-
 sity Press, 1946.
- Michael S. Sweeney "SECRETS OF VICTORY: The Office of Censor-
 ship and the American Press and Radio in World War 22001 by The
 University of North Carolina Press.
- W. A. SWANBERG "LUCE and HIS Empire" CHARLES SCRIBNER'S
 SONS NEW YORK 1972